

シタ・ツツラ初登頂

THE FIRST ASCENT OF SITA CHUCHURA

1970

日本大学ネパールヒマラヤ登山隊

NIHON UNIVERSITY NEPAL HIMALAYA EXPEDITION

目 次

<p>序</p> <p>はじめに</p> <p>I 計画にあたって</p> <p>II 隊の構成</p> <p>III 行動概要</p> <p>IV 食糧報告</p> <p>V 器具報告</p> <p>VI 装備報告</p> <p>VII 医療報告</p> <p>VIII 気象報告</p> <p>IX 16ミリムービーカメラ</p> <p>X 写真報告</p> <p>XI 輸送, 包装</p> <p>XII 会計報告, 協力者名簿</p> <p>XIII 行動日誌</p> <p>XIV EXPEDITIONARY NOTE</p> <p style="padding-left: 2em;">MEDICAL REPORT</p> <p>XV シタ・ツツラの山名について</p> <p>XVI シタ・ツツラの高度について</p> <p>おわりに</p> <p>登高表</p> <p>運行表</p> <p>概略図</p> <p>編集後記</p>	<p>平 沢 一 久</p> <p>清 田 清 1</p> <p>高 橋 正 彦 2</p> <p>高 橋 正 彦 3</p> <p>高 橋 正 彦 進 4</p> <p>中 村 進 洋 19</p> <p>原 田 洋 19</p> <p>平 野 隆 司 21</p> <p>樋 山 規 夫 22</p> <p>柴 田 健 一 23</p> <p>古 畑 勇 25</p> <p>平 戸 伸 之 27</p> <p>中 村 進 29</p> <p>中 村 進 31</p> <p>高 橋 正 彦 35</p> <p>中 山 昌 之 43</p> <p>S, NAKAMURA 45</p> <p>Dr, K, SHIBATA 49</p> <p>高 橋 正 彦 51</p> <p>高 橋 正 彦 51</p> <p>中 村 進 52</p> <p>..... 53~57</p> <p>..... 59~63</p> <p>..... 65~66</p> <p>..... 67</p>
---	--

序

当会は、1962年にムクト・ヒマルへ登山隊を派遣し、その主峰の初登頂とともに、チューレン・ヒマル山城の偵察に従事し、所期の成果をあげてまいりました。

これに続くべく若手OBが計画を練っておりましたが、それが熟しかけた1965年にはあいにくネパール・ヒマラヤの登山禁止により中断せざるを得ませんでした。しかし、若い力はそれにくじけることなく、地図の空白部を追ってさがしあてたのが、高度こそ劣るが、極地の厳しさをもつグリーンランド登山でありました。グリーンランドは予想された通り厳しいものであり、またそれによって魅力をましてゆき、重ねて4隊を送り、グリーンランド第2の高峰フォーレルの登頂とグリーンランドの横断を果し、その成果は各界から高く評価されました。ただどうしても満たされなかったのが高度の問題でありました。

その折りもあり、1969年のヒマラヤ登山解禁の朗報に接し、いちはやく登山隊の派遣を計画いたしました。これとほぼ時を同じくして進められていた日本山岳会のエヴェレスト登山計画および日本山岳会東海支部のマカルー登山計画に何名かの当会員が参画することから、われわれとしては大規模な登山は控え、次の世代をになうメンバーにヒマラヤ登山の基本を身につけさせることを目的とし、それにふさわしい山として、ムクト・ヒマル登山隊の情報をもとに、ダウラギリ山城にある6,000～7,000米の無名峰を取りあげ、あわせて、ムクト隊で十分解明されなかった。ヒドン・ヴァレー南部の地形を明らかにすべく登山隊を派遣することに決定しました。この報告書はその登山の概略を記述したものです。

幸いに、若い世代中心でヒマラヤ登山経験者皆無の登山隊ではありましたが

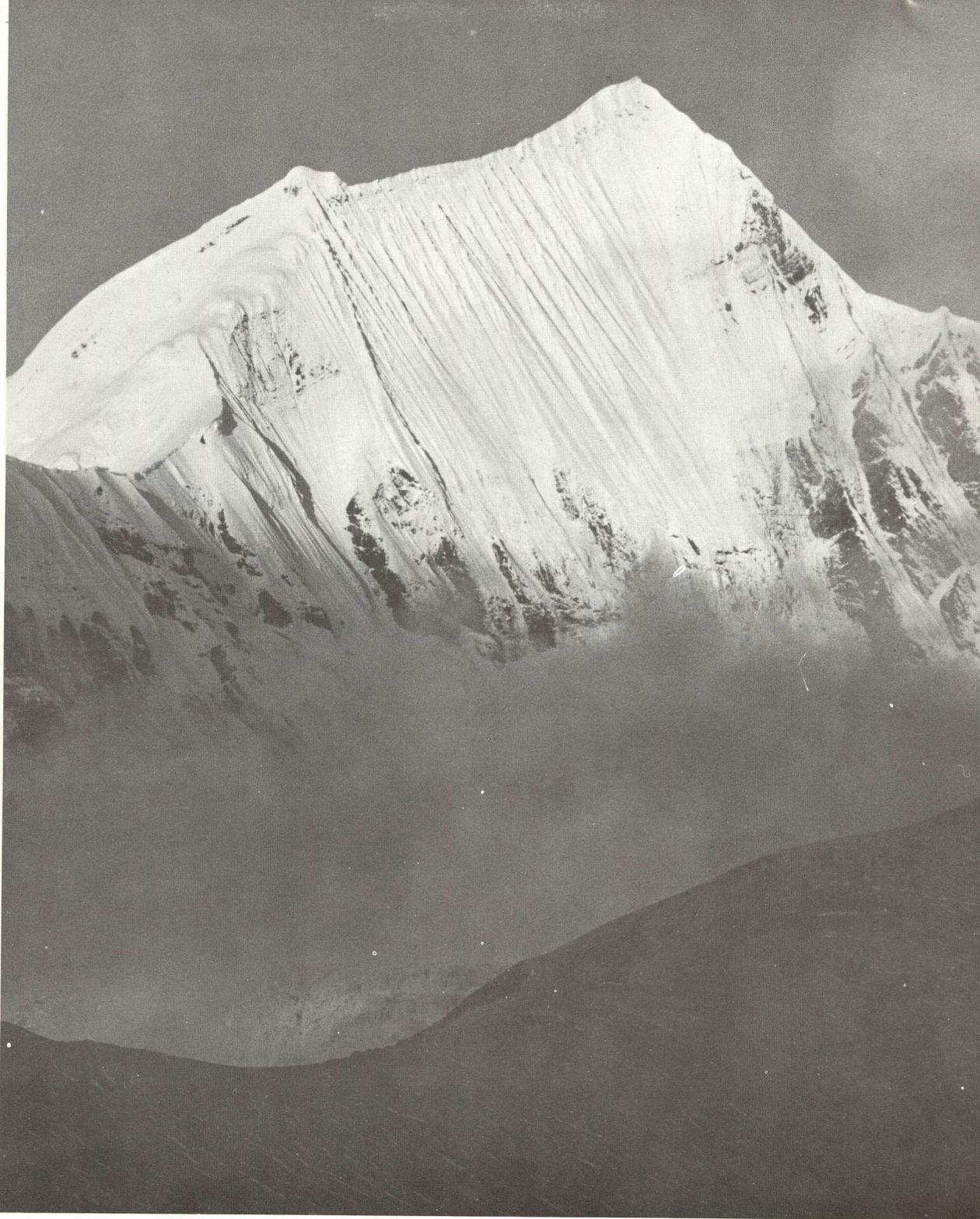
清田隊長の指揮のもとに全員よく力を合せ、所期の目標通り、1970年10月26日午後2時45分—無名峰（後にシタ・ツツラと命名）の初登頂をなすとともに、周辺地形の測量と、数多くの写真を得て、元気に帰国いたしましたことはなによりの喜びであります。

これもひとえに本計画にご賛同いただき、ご支援とご協力をおしかなかった関係各位のたまものと厚く御礼申し上げます。

本報告書は完全なものではありませんが、お世話いただいた方々に登山の概略を御報告するとともに、参加させた隊員はもちろんのこと、これに続く若い諸君の新しい登山計画のスタートであってほしいと祈っております。

桜門山岳会会長

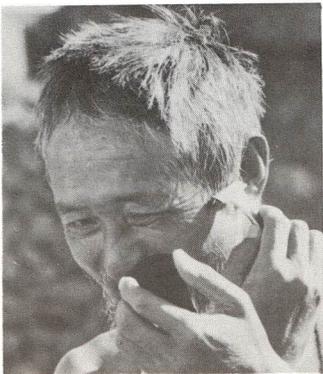
平 沢 一 久





2

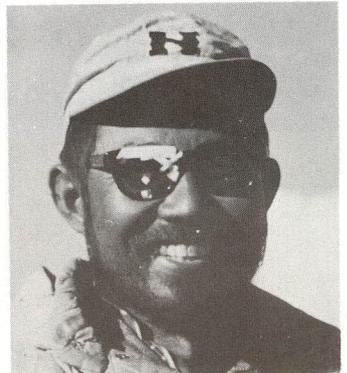
3



4



5





7

6



2: ヒドン・キャンプ (5000m) Hidden Camp (5000m)

3. 隊長 清田 清 Leader. Prof. K. Seita

4. 副隊長 高橋 正彦 Sub-Leader M.TaKahashi

5. 医師 柴田 健一 Dr. K. Shibata

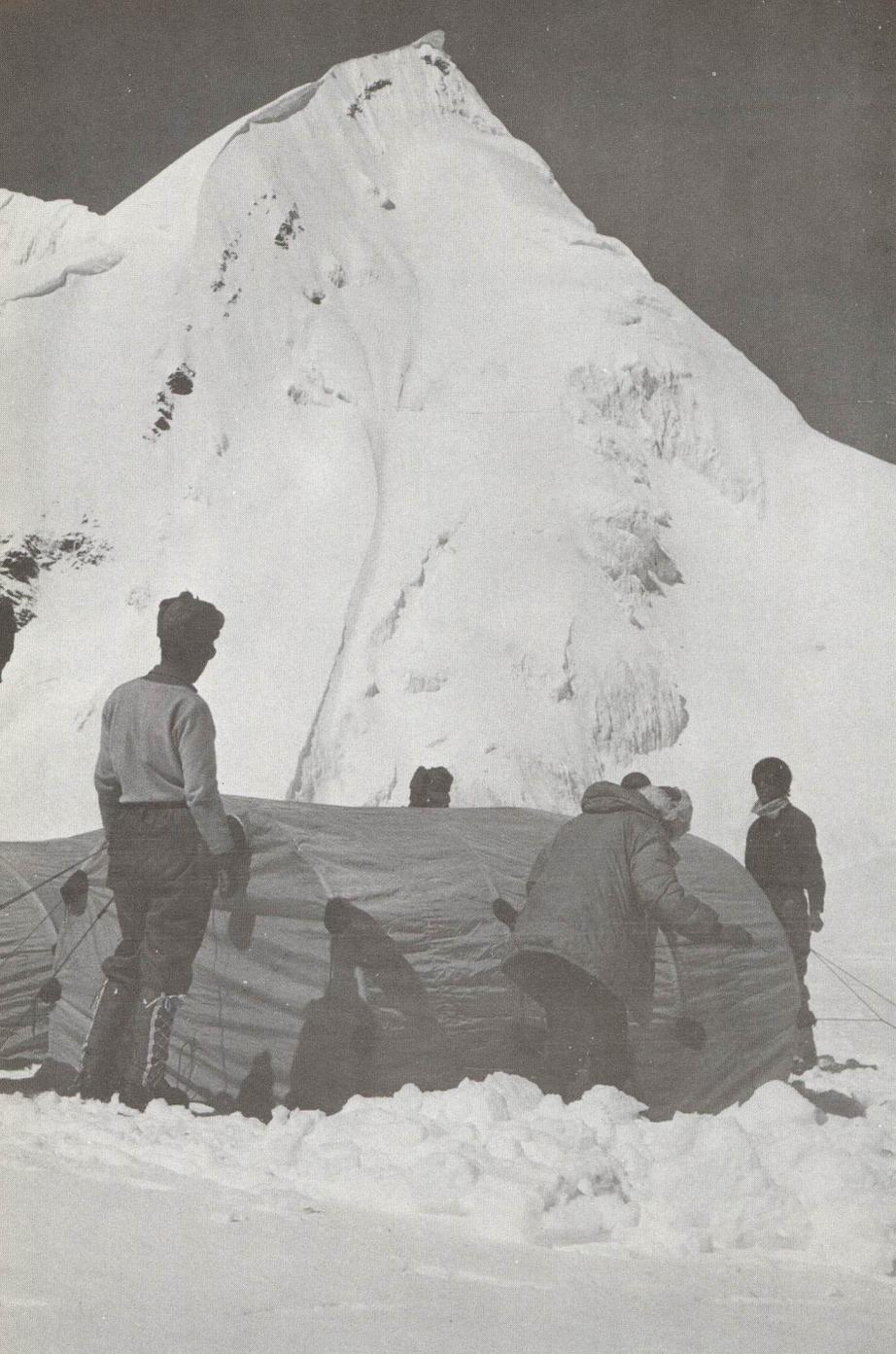
6. ネパール政府連絡官 パンチ・ビル・ライ

Liaison officer Panch Bir Rai

7. C.3の手前よりC.2を望む。後方、ダウラギリI峰北東コル

A view of Camp 2 from before Camp 3

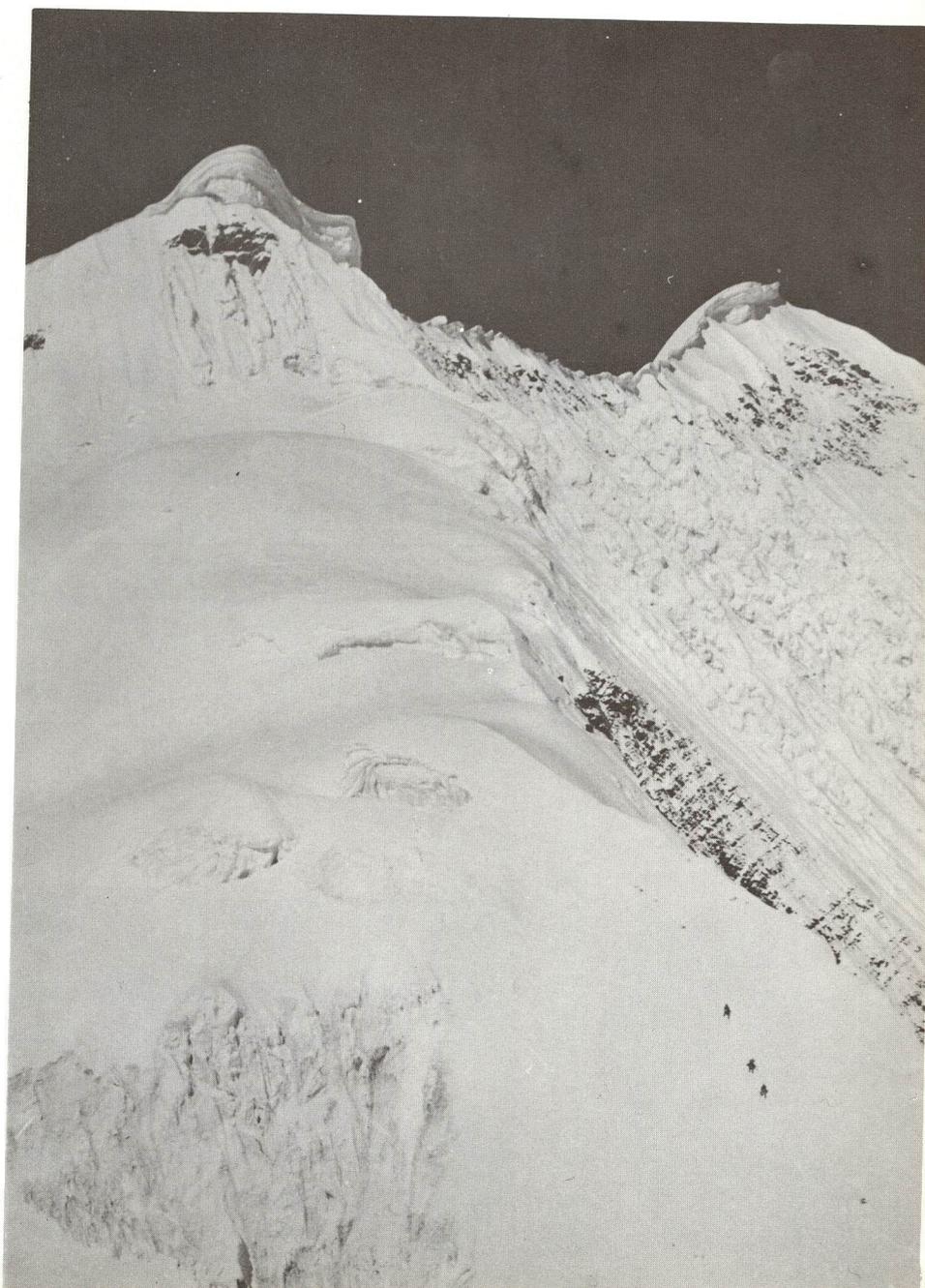
Behind, North-east pass of Dhauragiri-I (Photo 2-7, S.NaKamura)



8

8. キャンプ2の建設 (5900m) Set up Camp 2 (5900m) (photo. M. TaKahashi)

9. C.3へのルート開削 Making a route to Camp 3. (photo. S. NaKamura)



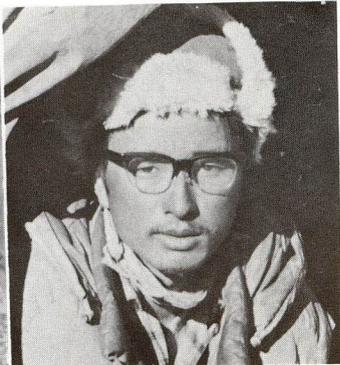
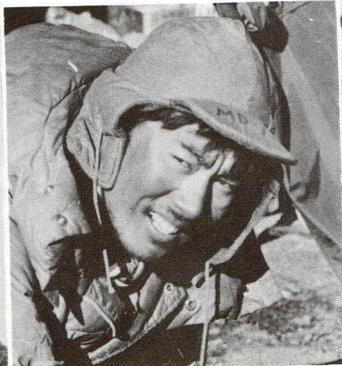


10

11

12

13



10. C. 3 へのルート開削

Making a route to Camp 3

11. 隊員 中村 進 S. NaKamura

12. 隊員 平戸伸之 N. Hirato

13. 隊員 古畑 勇 I. Furuhata

14. C. 3 への氷壁をゆく

Going up on the ice wall
to Camp 3

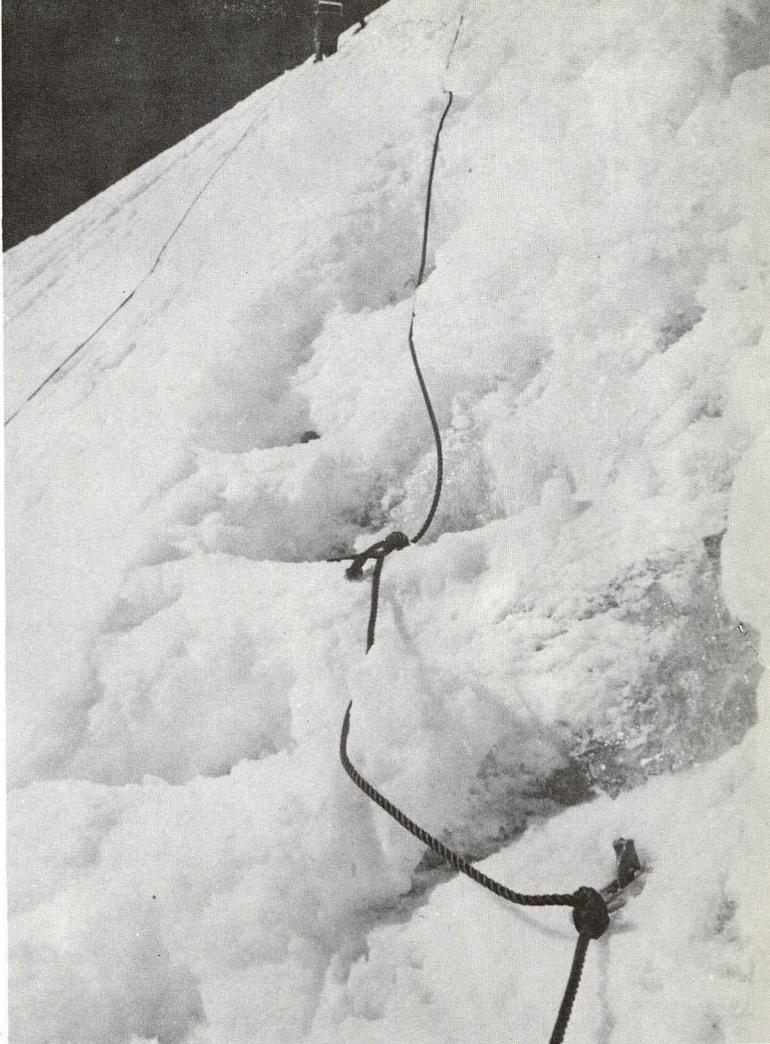
15. 5000mにて滑走実験をする

清田隊長

Leader Seita makes an
experiment of Slide on
the snow at 5000m high.

(photo. 10-15 S. NaKamura)

14

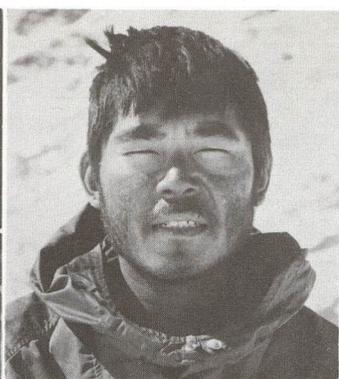


15

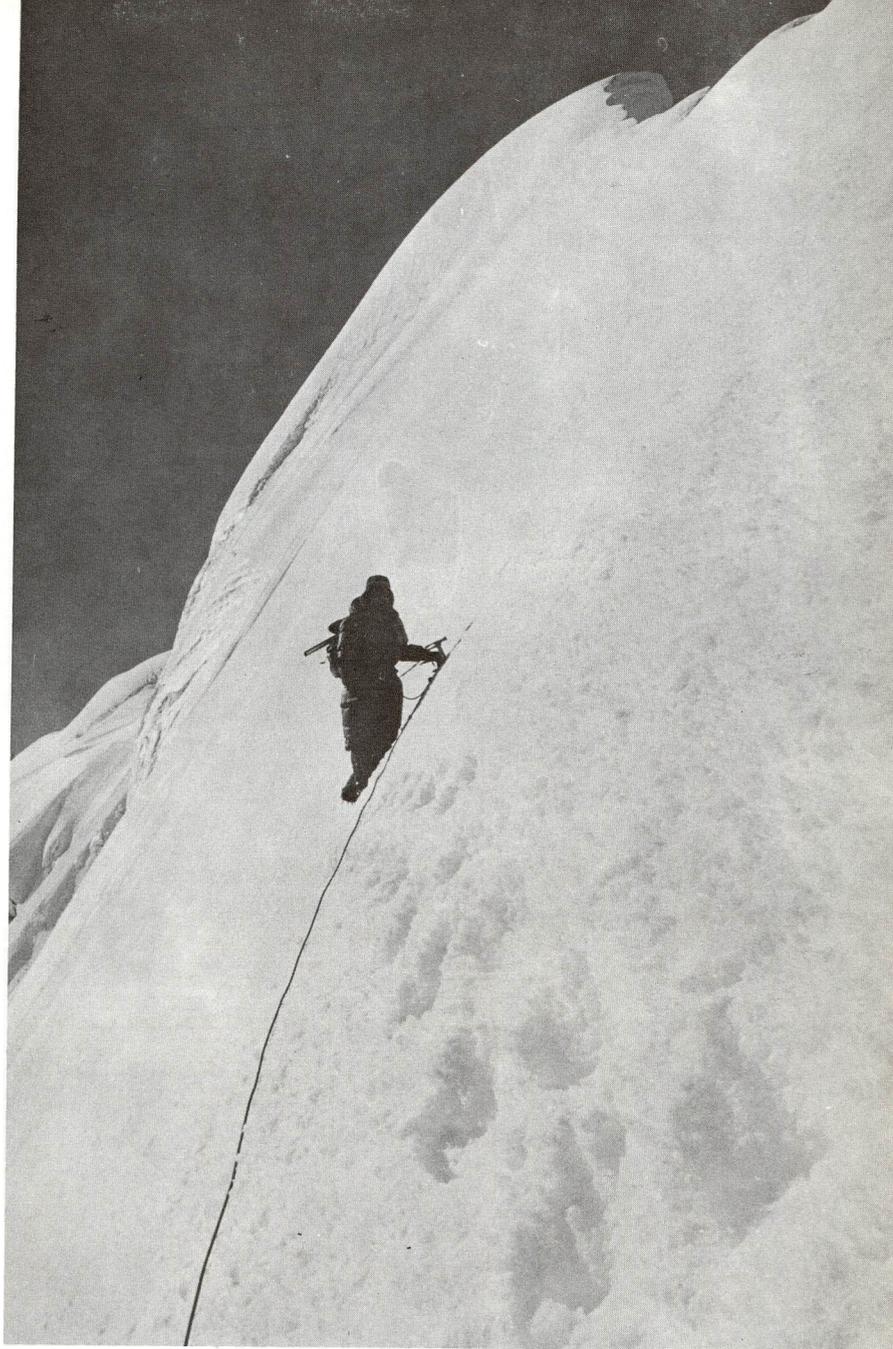




16



17 | 18
19 | 20



16. キャンプ3 (6300m) よりダウラギリI峰(8167m)を望む。 A view of Dhauragiri-I (8167m) from C. 3 (6300m)

17. 隊員 平野隆司 R.Hirano

18. 隊員 原田 洋 H.Harada

19. 隊員 樋山規夫 N. Hiyama

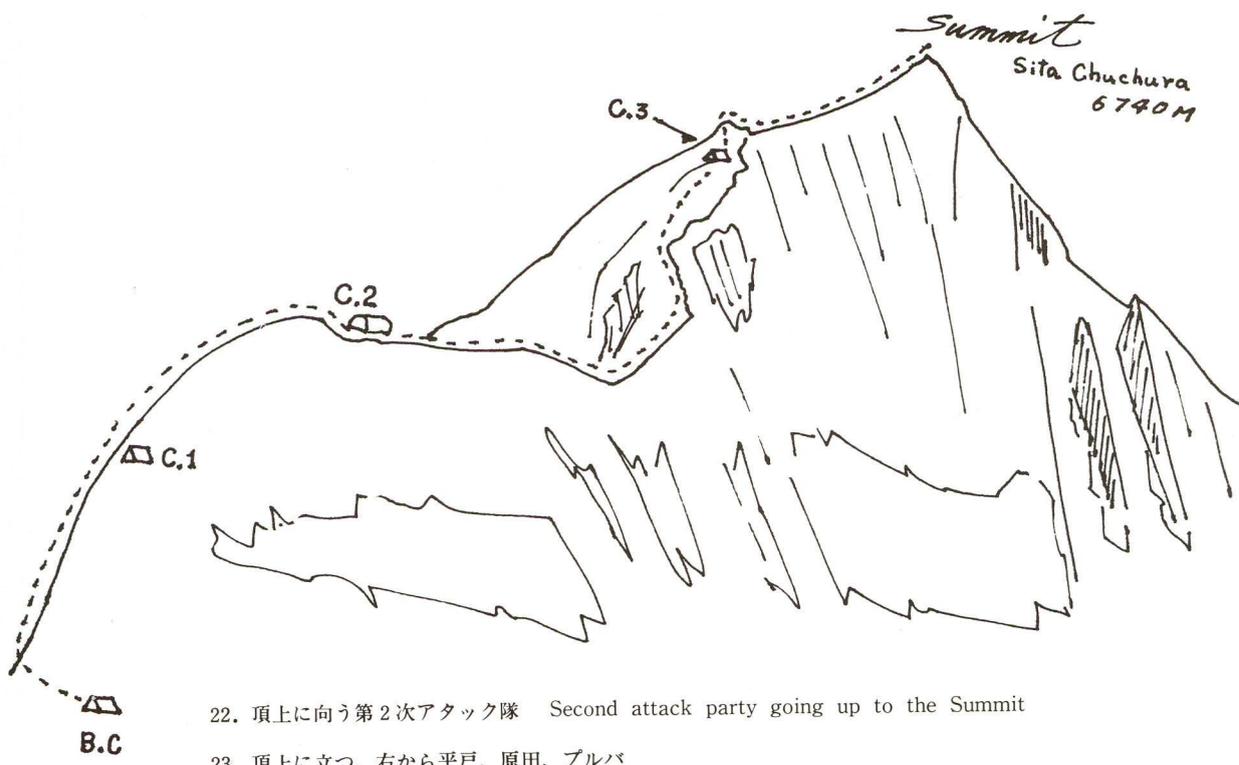
20. 隊員 中山昌之 M. NaKayama

21. 第一次アタック隊引返し地点, 後方山頂 Returning point of first attack party'

Behind Summit (Photo. 16—21 S. Nakamura)



22



22. 頂上に向う第2次アタック隊 Second attack party going up to the Summit

23. 頂上に立つ, 右から平戸, 原田, プルバ

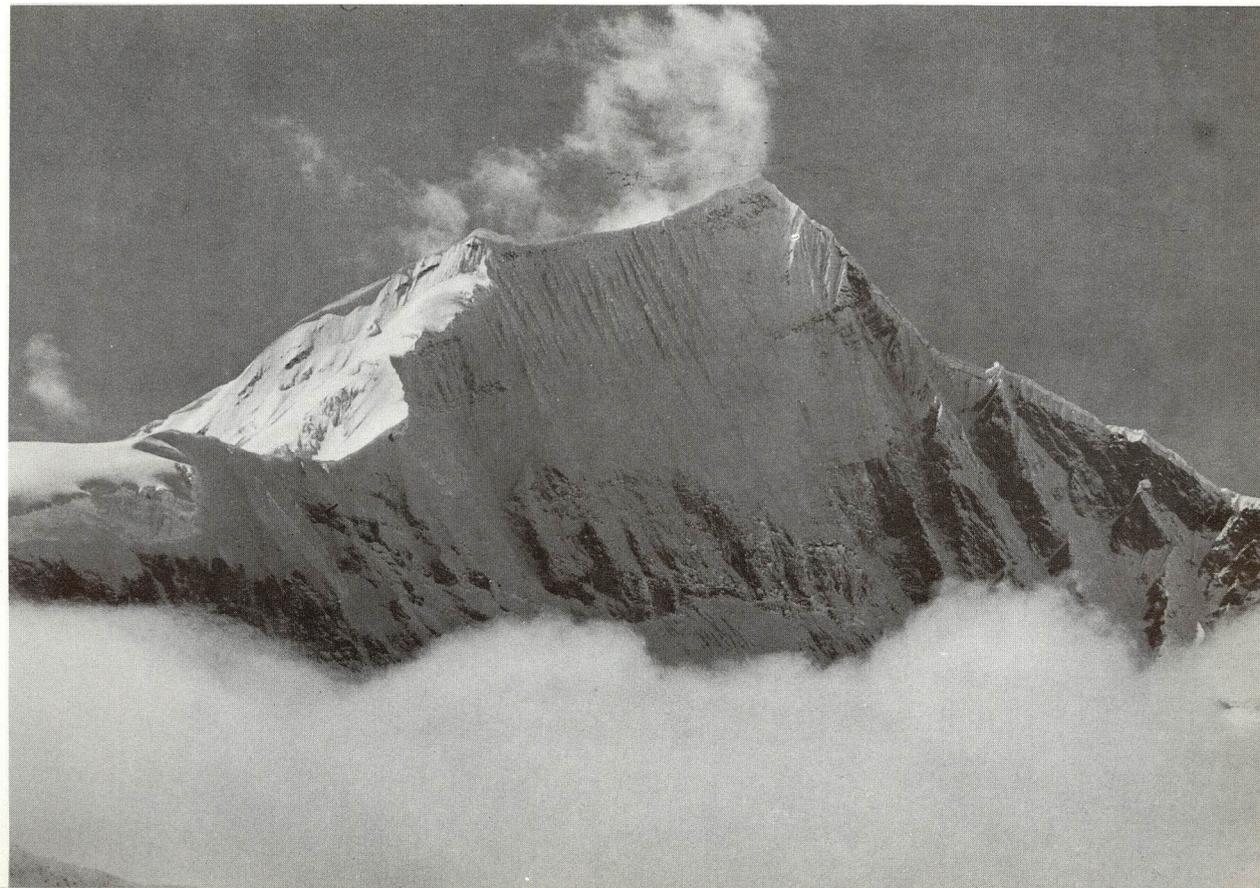
Hirato, Harada, purba (form right) on the Summit (photo. 22, 23 M. Takahashi)

24. シタ・ツツラ (6740m) Cita Chuchura (6740m) (photo. S. NaKamura)



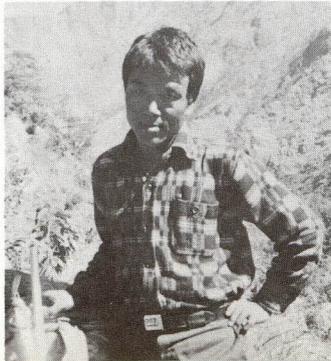
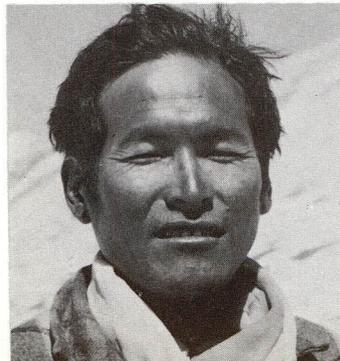
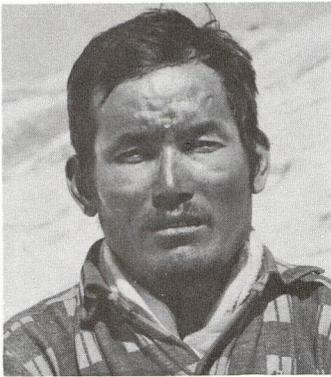
23

24





- 25. 乾燥馬肉, 乾燥野菜, ソーセージ,
牛肉, 日本大学農獣医学部食品学
科製造。
Dried horse meet,
Dried vegetables,
can Sausage, can
beef are manufactured
by faculty of food,
Nihon University.
- 26. サーダー, プルバ・キタル
Surder. purda kitar
- 27. コック, アン・ダワ
Cook. Ang Dawa
- 28. シェルパ, ニマ・プタール
Sherpa. Nima putar
- 29. シェルパ, テンバ
Sherpa. Temba
- 30. シェルパ, ワォンゲル
Sherpa. Wangel
- 31. メイル・ランナー, カルマ
Mail runner Kharma



は　じ　め　に

清　田　清

この報告によるヒマラヤ登山は日本大学単独の隊としては久しぶりのことであり、メンバーは熱心な若手OBが中心となりヒマラヤ経験者は一人もいないという構成となった。山岳部長という立場から隊長に祭りあげられてしまったが副隊長の指揮下隊員の一致協力によって初登頂という成功を収め得たのである。そのためにはヒマラヤに豊富な経験をもった金坂氏はじめOB諸氏から、あらかじめ十分な知識を得ることができたこと、ヒドンバレー・ルートについての鳥海OBの体験がルートと高度順化の關係に大いに参考になったことが第一に挙げられよう。同じ山岳部出身という縦の關係によるよい意味のチームワークも大切な要素であった。カトマンズの宮原OBの尽力によって最後に選んだ未峰はその時は無名峰であったが、荒涼たるヒドンバレーから眺めたヒマラヤひだの美しい山容はタウラギリI、ツクチェと共に素晴らしいの一語に尽きる。山の高度も手頃であり、ルートの選定も誤らず、なにより登はん中の恵まれた天候は幸運というより他ない。リュゾンキヒサー、シェルパ、ポーター達の献身的な協力も忘れることのできない成功の要因である。ツクチェ、タバコルまでは世界中からのトレッカー達でにぎわっていたが、コルを越えて一步ヒドンバレーに入ると、チベットに連なる山波が地の果を思わず荒涼たる景觀と変り自然の素晴らしさが満喫できる。ヒマラヤの現地人の生活は貧しく川水を使い薪を燃やし、ティーと酒はチャン、ロキシーを飲み、ツァンバ、チャパティを常食とし、目玉焼やシープ、モモザなどがご馳走なのである。彼等は知らないために我々よりかえって幸福なのかも知れない。なにより目の前かけがえのない素晴らしい自然がそっくり残っているのはうらやましい限りである。ヒマラヤの山々は人類に残された最後の自然であることは間違いのないであろう。最後にこの遠征にあたり日本大学、生産工学部、医学部、農獣医学部、桜門山岳会、隊員關係各位の物心両面にわたるご援助に改めて感謝の念を禁じ得ない次第である。

I 計画に当って

高橋正彦

今回のヒマラヤ登山の発端はなんといつても昭和44年5月22日のコーチ会であつた。この席上で折りから年間計画の検討をしていたコーチ会に於いて予想もしなかつた年度末(45年3月)にヒマラヤで春山合宿をやりたいという現役からの相談が全てを決したといつてよいと考える。

内容は全くおそまつなものでありOBはこれを一笑に付すること出来たであろう……こんな計画でヒマラヤ登山が出来ると思つているのか…と。しかし、このときばかりはそうではなかつた。むしろこのとき見たものは一昔前に何にがなんでもヒマラヤへと奔走していた自分の姿であり、この夢をこの時期にかなえさせてやりたいという気持であつた。

その翌日から若手OBは動き出した。山を語るのは楽しい、ましてや憧れのヒマラヤ登山を語るのは夜のふけるのも忘れる思いであつた。しかし現実はそのうは簡単でなかつた。知れば知る程日本の山とヒマラヤはギャップがあり過ぎた。それは現役が主力では難しいという結論である。ここまでくるには多くのOBの助言があつたことはもちろんだが、私はヒマラヤを変えたくなかつた。というより“ヒマラヤの処女峰へ”という夢に妥協するとわけにはいかなかつた。これを基本として出来る限りの若手を参加させるという意図で計画されたのが今回のヒマラヤ登山計画である。

メンバーは清田隊長以下全員がヒマラヤ初めてという不安はあつたが、若手OB主力となればこれも己むを得ないことであつた。しかし結果的にはこれが経験あるOBの適切な助言と合致し、登山に成功した大きなウエートを示めたと考える。こう考えるにつき今回の登山は名実ともに我々隊員だけではなせ得ないものであつた。物心両面にわたり数多くの方々に御協力いただいた感謝の気持は登山の思い出と同様生涯忘れ得ないものとなりました。

Ⅲ 隊 の 構 成

隊の構成は、最終的に次の様に決定した。

隊 長	清 田	清 (6 1)	生産工学部教授 山岳部部长
副隊長	高 橋	正 彦 (3 2)	企画 中央ビルト工業勤務 生産工学部卒
隊 員	中 村	進 (2 4)	涉外・輸送・写真 経済学部卒
	古 畑	勇 (2 5)	気象 経済学部卒
	平 戸	伸 之 (2 4)	映画 日本製鋼所勤務 生産工学部卒
	平 野	隆 司 (2 3)	涉外・器具 農獣医学部学生
	原 田	洋 (2 3)	食糧 経済学部卒
	樋 山	規 夫 (2 3)	装備 商学部卒
	中 山	昌 之 (2 4)	装備 経済学部学生
	柴 田	健 一 (3 2)	医師 日大板橋病院勤務

隊長と医師を除き、全員が日本大学山岳部の現役又はOBであり、清田隊長は東大スキー山岳部OB、柴田医師は医学部山岳部OBである。

シエルバの構成は、最終的にはすべて現地にて決定した。

サーダー	ブルバ・キタール (Pruba kiter)	(4 1)
シエルバ	ニマ・プタール (Nima Puter)	(3 5)
"	テンバ (Temba)	(2 6)
コック	アン・ダワⅢ (Ang Dawa Ⅲ)	(3 5)
キッチンボーイ	ウオンゲル (Wangel)	(2 1)
メケル・ランナー	カルマ (Karuma)	(3 0)

これに、ネパール政府連絡官パンチャ・ビル・ライ (Panch Bir Rai) (3 0) が同行し、総勢 1 7 名の隊構成となつた。

Ⅲ 行 動 概 要

1. 先 発 隊 一 現 地 交 渉 一

中 村 進

約 2.6 トンの登山物資は、大阪商船の奈良山丸に積まれ、すでに南シナ海の洋上をカルカッタに向つて進行中であつた。

登山許可証も入手し、幾つかの問題を残しながらも準備は順調に進行し、本隊の出発も 8 月 29 日と決定した。

先発隊の主な仕事は、カルカッタからネパールまでの物資の陸送に同行し、無事カトマンズまで集結させる事、またその前にネパールへの輸入許可証を入手すること。さらに、バウダから他の山への変更願ひ申請をして、その許可を得る事にあつた。こうした事は、日本からの文書の交換では、3ヶ月も4ヶ月も時間がかかつてしまう上、確実性がなく、有利な方法でもない。さらに、我々には、1ヶ月と少々有余しかなく、これには、現地にて交渉するのが最良であることは言うまでもなかつた。

7 月 25 日、沢山の先輩、友人達に見送られて、平野と私は羽田から空路カトマンズへ飛びたつたのである。

その夜は、カトマンズ行きの飛行機に乗換えるため、カルカッタのグレート・イースタン・ホテルへ入る。

空港では、目の玉ギョロリの検閲官に唾が飛んできそうな早口のブローケン・イングリッシュに攻められたり、ホテルまでのバスの中では、6キロもあるタイプライターが、バスが大きくゆれた時、前席のアメリカ人の頭に、ゴツンとぶい音を出して落ち、隣席の友人にペチャクチャ再び唾を飛ばされんばかりであつた。

ホテルに着いて、部屋に入るやいなや、ネクタイをゆるめ、ビールを2本注文する。

ホット一息つくことができたがすぐ寝るわけにはゆかない、さつそくカルカ

ツタの乙仲（通商代理業）に登山物資の陸上げ、通関、陸送の手配を依頼する文書をタイプで打ち始める。

インド産のビールは、少々日本のものと、色も味も違う様である。個人的な評価をすると、栓をぬかれて4、5日放置しておいた様な味だ。書類が出来上つた頃はすでに3時をまわつてしまつた。明日8時にはバスが来ると言う。寝る時間もないと思つていたら、日本とインドの時差3時間半程得をした。

26日、カルカッタの空港で書類を投かんしカトマンズに入る。

今回の計画発生当初、物心両面から協力していただいている宮原氏は、ネパールに駐在し、ホテル・エベレスト・ビューの建設に精進している方である。空港からまつすぐ氏の事務所へ向う。幸い宮原氏は在宅していた。これまでのお礼を述べ、これからの我々の予定を話すと、さつそく、事務所の部屋の一室を提供して下さり、山の変更に関しても色々なアドバイスをして下さいました。

翌27日、日本大使館に行き、計画書を提出し吉良大使と数分談話をする。大使より日ネの親善と、計画の無事成功を祈る、とのお言葉をいただいた。午後、宮原氏に同行し外務省に行く、ここで、輸入許可証、山の変更願の申請をする。

28日、外務省にて、リコメンデーションをいただき、商工省に行く。輸入許可証の交付には、130ルピーをネパール・ラスタ・バンク（Nepal Rastha Bank）に払い込み、そのレシートを再びここに持参せよ、と言われさつそく銀行へ行く、銀行で、その振込み用紙をもらつたのであるが、すべて上という文字をさかさにした様なネパール語でかかれてあり、まったくチンプンカンプン。しかし、心配には及ばず、子供の代筆屋が商売繁盛とばかりに我々のものもササーと書き上げてくれた。彼らは英語もなかなか上手で国際的である。これは、外国人ばかりでなく、同国人の中にも文盲な人が多いためであろう。我々は代筆料として50パイサ（約18円）支払つた。

こうして、再び商工省へ戻ると、別の書類を作つてくれ、交付は“トモロー”とのことであつた。

翌29日、予定どおり輸入許可証の交付をうける。

31日、2日がかかりで作つた。山の変更願い書を、宮原氏に、丁寧に打ち直していただき午後、外務省へ提出した。返答は、3日後にもらえることになる。帰路、ヒマラヤンソサエティーに寄り、シエルパの予約申込みを行なう。

8月3日、どの様な結果がでているかと不安な気持ちで、二人は輸タクに乗り外務省へ向う、この往路もすつかりおなじみとなる。

返答は我々の意に反し次のごとくであつた

“Pigferago is impossibility, but Tashi Khang is Possibility.”

我々が望んでいたのはピグフェラゴ(Pigferago 6620m)であつたので少々ガツカリとしたが、一応本部と連絡をとり検討することにして申し込みは後日にしたのである。

五日、輸入許可証(Import License)も入手できたので、私は船荷の受領及びカルカッタからネパールまでの物資の陸送に同行するため今夕カルカッタへ出発することにした。

ここで、本部からの返事を待たずして再び、宮原氏を混じえ、平野と私で検討し、ニセ・ダウラ(仮名、後シタ・ツツラと命名)を申し込んでみることにした。ここで平野はカトマンズに残り、山の変更願い、及びシエパの予約等の仕事を行なうことになつたのである。

私は、その後、5日の晩より10日間カルカッタにいて、荷物の到着、通関を待ち、14日の夜遅くトラックに同乗し、19日の午後、カトマンズの空港に着く、平野がさっそくかけつけてくれ、その日の夕方通関も終了し、宮原氏の事務所の庭先にすべての物資がトラブルなく収容できたのである。

この間、平野は、予定の仕事の大半を終了させ、互いに、トラブルの少ない事を喜びあり。

翌20日、外務省へ行くと、嬉しい返事が我々を待つていてくれたのである。その正式の新しいパーミツシヨンの本文を登載しておこう。

「 August 27, 1970

Dear Prof. Seita,

With reference to Your Letter of the August 1970, I have the pleasure to confirm that your party will carry out the climbing expedition to the north-west peak of tukuche as proposed in the sketch map attached with the said Letter instead of Bauddha Peak .

yours sincerely

(Gobarclhan B.Shah)

Acting Under-Secretary]

この文中の the north-west peak of Tukuche がシタ・ツツラである。さっそく、荷物が無事収容できたこと、ニュー・パーミツシヨンを入手した事を東京へ打電する。

こうして、30日、本隊がカトマンズに着く迄、荷物の整理、ポカラ迄の飛行機の予約、シエパ、ポーターの予約を終了させることができたのである。最後に、再び宮原氏のご好意に対し、厚く、お礼申し上げる次第であります。



2. 本隊出発（東京ーカトマンズ）

高橋正彦

8月29日、心配された台風12号は、はるか南方海上に去り、羽田の上空は雲一つない晴天となつた。

見送りにかけつけてくださつた方々の顔を一つ一つ思い出しているうちに、ボーイング707は高度をグングンと上げていつた。

2時間程でホンコンに到着、そして、バンコックを経て、11時15分（インドタイム7時45分）カルカッタに到着した。ここでワンナイトを過し、カトマンズに向うのだが、我々が、トランシーバー、16ミリムービーカメラ、ラジオ等様々な品を携帯していたので、通過客といつても、荷物の持ち込みを許可してくれず、結局、保税処置をされ、荷物はカトマンズへ別送されることになつてしまつた。

翌日、正午近く、カトマンズに着く、宮原氏の事務所に入ると、中村と平野は、これから空港へ出向えに行くところであつたらしく、ふいに現われた我々を見て、驚いた様子であつた。

3. 登山活動

中 村 進

(1) カトマンズ——ポカラ

本隊の人達のカトマンズ滞在は、宮原氏の事務所の一室を借用してここに隊長以下数名宿泊し、残りの数名は、庭にテントを張り、ポカラへ発つまでの数日を過ごすことにした。本隊が着く数日前より、庭に張るテントに合わせ、床板を造り始める。

8月28日、平野と床板を造っていると、どうも、熱っぽく調子が悪いので、昼頃より部屋で横になつていたら、次第に寒気、下痢腹痛が激しくなり、夕方には、高熱で手足が硬直してきて、歩行も困難になつてしまつた。事務所の木沢氏と平野に抱かれ、サンタバーンというアメリカのミッションの病院へ入る。この晩は、意識もはっきりせず、朝まで点滴をされ、ぐつたりしていた。翌日、木沢氏と平野が心配して来てくれた。平野がカトマンズでは極上と思えるリンゴを随分無理して買ってきてくれた。真に涙が出る。というのは、平野と私のカトマンズの生活はリンゴ1つも贅沢をしなかつたからである。

8月30日、まだフラフラするが、本隊が到着する日である。主治医のアメリカ人は、外出は不許可、しかたなくこつそりとぬけ出る。本隊の人達と1ヶ月ぶりに再会し、しばらく話しがはずむ、夜になり木沢氏に病院まで送つていただいた。病室に戻ると、婦長さんがカンカンだつたらしく、同室の患者がぐすくす笑つていた。

9月4日に退院するまで、毎日、10時の検診が終ると病院を出て、ポカラまでのチャーター機の予約、航空券の購入、隊員のビザのエクステンション、トリッキングパーミットの申請等の仕事を進める。

9月3日、ポーターの手配をスムーズに行なうため、高橋、原田、プルバの3名をポカラへ先行させた。5日、チャーター機は2.6トンの物資で限界であつたので、残りの隊員はあらかじめ、定期便に乗る様、チケットを購入してお

いた。なを、平野、中山は、現在シエルパのアンニマをナムチエへ酸素を取りに行かせているので彼が戻り次第、後続するかたちをとり、カトマンズに残った。

(2) ポカラ —— ツクチェ

草地のポカラ空港におろされた物資には、すべて番号札がつけられ、同じ番号札を首にかけたポーターは、空港の門で、30ルピーの前渡金をもらうと、すたすたと出発を始めた。ナイケ2名、ポーター98名、隊員10名、シエルパ5名のキャラバンである。

9月9日、タトパニに着く、5日ポカラを出発してから丁度5日目である。タトとはネパール語で熱いことを意味し、パニは水を意味する。すなわち温水が出る場所なのである。部落の裏のカリガンダキの河原にあり、直径3m位、深さは腰位、透明、適温、の快適な露天風呂であつた。

タトパニを過ぎダナに入る。ここでポリスにパスポートをチェックされ、記念写真をねだられる。この日はガンサの民家に全員泊まることになつた。ここへ来るまでも幾度かあつたが、柴田先生はたちどころに多忙となる、患者は、足のふくらはぎにウミがたまつて赤く腫れあがつた少女、ここまで来ると、外科、

内科、眼科、なんでも屋になつてしまふ様だ。メスでブスと切るとウミがウズラの玉子程出てきた。さすがに痛いらしく、ヒーヒー泣いていた。多いのは、切傷を化膿させたものと、カゼ、等である。

いよいよ、カリガンダキも深い溪谷をやわらげると広いU字形の谷となり、広い河原が出現しはじめる。部落の建物も、カヤヤ、石を屋根にひいた家形から、石造りで屋根は平らで土をのせた家となり、魔よけの白い旗が風に静かになびいてい



る。右手には、未登のニルギリが頭に雪をいつばいつけて鋭くそびえたつ。部落入口の短い丸木橋を渡り、道路神のわきを通ると、ここがキャラバンの最終部落、ツクチエであつた。

(3) ヒドン・バレーへの荷上げ

ツクチエでは、トラチャンというラマの家の1室を借用することにした。

キャラバンの疲れをいやす間もなく、翌、13日には、44名のポーターを使い、小雨の中荷上げに出発する。大体3800m位のカルカにテントを張つたのであるが、さすがここまでくると、朝夕の冷込みは強く薄着のポカラからきたポーター達は、体を寄せあつて一夜を明かした。

翌日も雨、数名のポーターは前進を拒否し下つてしまつた。2時間程で次のカルカに着く、濃霧のため位置の確認がよくできないが、シエルパによると、ここからヒドンまでは4時間程だ、といい、先にはポーターの泊る場所がない、というので行動を中止した。

ツクチエを出発して3日目、今日も濃霧の中視界は悪るい、4時間位でヒドンのキャンプ地予定地まで行けると思つていたら、8時間もかかつて、ヒドンへ下る峠の手前にやつと達したのである。同じ日、1日遅れでツクチエを出た、31名のツクチエのポーターは装備も十分、土地にも慣れており、2日目にしてほぼ同地点迄達つしていた。

9月16日、ツクチエを出て4日目、ここ数日天候悪るく、タバ・コル(ダンプツシュ・パス)には雪がかかつていいる。これを見たポーターは、再び前進を拒否し、荷を投げ出して帰えり出してしまつた。しかたなくボクシスはずむことにして、なんとかヒドン・バレーに荷を集結することが出来た。

帰路、カルカに1泊し、ツクチエに戻ると問題がもち上つてしまつた。1日少ない日数で同じ仕事をしたツクチエのポーター達が、ポカラのポーターと

同様の待遇をせよ、と言うのである。何回もことわつたのだが、結局、ポカラポーターと同様にすることになつた。

さて、荷物の集結が終了したので、今度は、隊員の高度順応を計りながら、ヒドンバレーのキャンプに前進を開始することにした。

ツクチエの高度は約2600m、ヒドンのキャンプ地は5000mである。途中でキャンプを二つ設営し、全員が各自のペースで順応を行なつた、清田隊長は高齢にもかかわらず、何回も上下され、8日目にヒドンキャンプに入つた。

9月26日、全員ヒドンキャンプにて休養し、荷物の整理、登頂ルート of 偵察に関して打合せを行なつたのである。

(4) 登頂ルートの決定とB.C建設

打合せの結果、次の4隊に分散し、ルートを偵察することになつた。

第1パーティ、マヤンデイ氷河側、L中村、古畑、ニマ・プタール

第2パーティ、北方尾根、L平戸、樋山、テンバ、第3パーティ 東尾根、L平野、中山、ブルバ、第4パーティ、ツクチエピーク側より遠望、L高橋、原田、柴田 アンダワ

この結果、平野の偵察した東尾根を登頂ルートとして用いることに決定したのである。

9月30日、ヒドン・キャンプの荷をフレンチ・コルを越え高度にして100m下つた地点に移動することにした。すっかり高度になれた隊員は、40Kg近い荷を背負い快調に進む、この日2往復し、翌日10月1日、ダウラギリI峰を眼前におき、東にブライトホルン、ツクチエピーク、西にシタ・ツツラ囲まれた、マヤンデイ氷河源頭にベースキャンプを建設した。

(5) C₁ から A C 建設まで

10月2日、C₁ へのルート偵察をかね、中村、平戸、古畑、平野、原田、それにプルバ、ニマ、テンバの8名によつてC₁ のキャンプ地を定め、なをかつ120Kg程の荷上げがなされた。翌日もひき続き荷上げを行ない、10月4日中村、平戸、古畑、プルバの4名でC₁ 入りし、C₂ へのルート偵察を行なうことになった。同じ日、高橋、平野、原田、樋山、それにシエルバ3名により荷上げが続行された。

10月5日、C₁ 入りした4名は、約6000m近くまで上り、C₂ 予定地を確認したが、それより先は濃霧のため前進をやめC₁ に戻る。一方、昨日より調子をくずしていた中山は増々容体が悪化し、体温も上り、食欲もおとろえ、セミ込みが激しくなり、原田、ニマに付き添われて柴田ドクターのいるヒドン・キャブへ下つた。

10月6日、天候悪く風雪である。C₁ の中村以下4名B・C に下り、平野、アンダワ、テンバC₁ 入りする。この晩、ヒドン・キャンプの柴田ドクターより交信があり、中山の容体は非常に悪く、一刻も早く下へ降ろさねばならなくなつた。明らかに高山病である。救急用に自参した4本の酸素ボンベが中山の生命を確保してくれていた。しかし、柴田ドクターは、酸素が消却したら危険だ、直ちに下へ降さなくてはいけない、と適切な判断をしていた。B・C へ休養に下りた中村、平戸、古畑プルバは翌日、風雪の中、フレンチコルを越えヒドンキャンプに入る。その晩、柴田ドクターは寝ずに中山の看護にあつてくれた。

10月8日、久しぶりに晴天となつた。この数日の降雪で、すっかりヒドンバレーは雪におおわれ、新積雪は50cm位に達つしていた。キャンパスの底に2本足が通る穴をあけて中山を入れる、それを背負子で1人1人交替で背負つたが、身長180の隊中1番の大男、5000mの高度ではさすがのシエルバ

も長く続かない。全員で交替しながらゆく、タバコルへの登りはとにかく辛かった。夕方やつとコルを越えた地点に着いた。2日分しか用意しなかつた食糧この晩から1名分を2人で食べることにする。なを、この救出に隊長もツクチエでの休養をかねて同行しているが、中山の安否に非常に気をつかわれている。結局、この救出にはツクチエまで4日間を要した。4日目は、隊員もシエルバも中山を背負う元気が消失し始めてきたので、プルバをツクチエに走しらせ、下から強いポーターを3名呼んだ。4日目は、この3人のポーターが交替で一気にツクチエまで下山することが出来た。ツクチエに着くとすでに中山は食欲も出て、顔のむくみも次第にひいてきていた。

10月13日、1日ツクチエで休養をとつた中村、平戸、古畑、プルバ、ニマ、テンバは早朝B.Cへ向け出発した。なを中山は柴田ドクターの指示に従がいしばらくツクチエで休養することになった。また隊長も4.5日休養した後、ドクターとB.C入りすることにした。

10月16日、救出に向つた6名は一気にC1に入る。翌17日、全員C2に集結しここで再び登はん活動が再開されることとなつた。この間約10日間行動はストップしていたのである。

18日、快晴、C2からしばらく広い平坦な屋根をたどると、次第に胸をつく様な急な雪壁となつてくる。表面2~30cmのザラメ雪を掘ると下はゴチゴチのブルーアイスである。ここに凹形のアイスハーケンを打ち、フィックスドロープを個定してゆく、実によくきく、まるで岩に打ち込んでいる様だ、囲わりの氷もくだけない。

19日、昨日のフィックスをさらにのぼす傾斜は極度に増す、40~50度近い、ルート工作は3パーティに分れ、トップがルート開拓、次に荷上げ、そして最後が16ミリの撮影パーティである。下からの予想に反し、C3予定地迄のルート開拓は2日で終了した。

10月20日、中村、平戸、ブルバ、ニマの4名はC3（A.C）入りし、その日の午後、C3上方の雪壁を偵察した。C3の高度は大体6300～6400位である。偵察の結果、取付地点にヒドンクレバスがあり、ハシゴが必要となる。この晩、中村C3の高度に順応せず翌日一気にB、C迄下山した。

22日、平戸、平野で氷壁のルート開拓に着手、急傾斜と硬いブルーアイスに相当てこずっている、23日、その後を受けて、高橋、平野、原田の3名により、稜線の雪庇をやぶり、氷壁のルートが開られたのである。

24日、第一次登頂明日25日とし中村、平野と決定、全員登頂を目標にしたのである。

第一次アタック

平野 隆 司

朝5時、ポポーという石油コンロの音で眠がさめる。隣りのテントで高橋、平戸、原田、プルバラ4人が、我々2人のために朝食を作ってくれている。

10月25日、快晴、第1次アタック隊として中村、平野は早朝03を出発した。キャンプを出るとすぐ傾斜70度、距離100mの氷壁をフィックスド・ロープを利用してよじ登り主積線に立つと朝日に映えた頂上はするどい雪の尖りとなつて手が届きそうな近さとなつてせまつてくる。あまりの近さに既に登頂した様な気持になつてしまつた「遠い!、こんなにもあつたのか」

時計は既に午後2時を過ぎ、キャンプを出てから7時間以上もたつた。休息をとる時間も惜しみながら進む。まるで頂上が遠くへ逃げてゆくようにちつとも近ずいてゆかない。中村隊員がザイルいつばいまでカッティングして前進、今度は僕がまたザイルいつばい前進する。全く単調なリズムを繰り返す。

傾斜が次第に増してきた、50度を越すだろう、股の間から3000m以上の空間を飛び越えてマヤンディ・コーラの男性的な姿が眼にとび込んでくる。

カッティングが続く、前進、そして前進、逆光に雪が燻し銀のように気味悪い。全く静かだ、まるで宇宙船で別の世界へ来たようだ。聞えるのは、ザクツ、ザクツと静かにピツケルで雪をけずる声と、2人の呼吸がハーハーと小さく耳に入ってくるだけだ。

しかし、この静寂もついに破られた。

「引き返えそう」中村リーダーの声であつた。

帰路は辛く厳しかつた。すっかり陽も沈み次第に暗くなつてきた。冷い風が羽毛服をつきぬけて、体を刺す。最後の雪壁を下り出す頃には、すっかり暗くなつてしまつた。足下もよく見えない。フィックスドロープに身をまかせて下る。下から声がした。そして、一ツ二ツとライトの光が我々を照らしてくれている。心配して外に出てきてくれたのだ。第1次アタックは失敗に終つた。

初登頂 — 第二次アタック —

原 田 洋

前日のアタック失敗によつて、頂上迄の距離がかなりあることがわかつた。今度は、ザイルパーティーを、高橋とブルバ、平戸と原田の2パーティーで構成、ピバークの準備もととのえ、26日、朝6時、アタックキャンプを出発した。キャンプ前の雪壁は30分で登りきる。前日の中村、平野のトレースがある為、彼等が引返えした地点迄(9時20分)ハイペースで来た。この付近は50度を過える急傾斜である。これから先はトレースが無い為、慎重にアイスパイルで支点を作り、ピッケルでステップを刻む。雪面より20cm下は、堅い氷で、アイスパイルも深く刺さらない。数ピッチの後、頂上手前の暖傾針の所で4人集合し小休止する。キャンプを出てからここまで、休める場所もなかつたのである。ここから最後のピッチにかかる、未登の山頂は我々が足を踏み入れるのを許そうとしている。ここで、ネパールのブルバを先頭に出し、午後2時45分頂上に立つ。ポリウムをいつばいにしたトランシーバーの声は各キャンプの隊員にこの瞬間を伝えた。山頂の西には、ダウラギリ2峰が尾根づたいに大きくそびえ、南には、マヤンデーグレッシャーをはさんで、ダウラギリ1峰が夕日に赤くそまり、大男を見上げる様にさらに高く天へつき出ている。写真撮影をして、午後4時過ぎ、山頂にネパール、日本両国旗と校旗を残し、危険な帰路を慎重に下降を開始した。

(6) 撤 収

26日、午後2時45分、3名の隊員と1名のシエバにより、ダウラギリ山塊の1無名峰は初登頂された。これまで続いた晴天は、28日より降雪となり始め、撤収は、3名の隊員の不調とかさなつて、困難をきわめていたが、若いエネルギーは無事撤収を完了させた。10月30日、全員B.Cに集結、ツクチエ村にいる中山が欠けているのが残念だが、彼も喜んでくれたことだろう。夜は、日本から持参したカニ缶と日本酒で、シエルパダンスと歌に興じていると、1年半にもおよんだ準備や色々なことが頭の中を駆けめぐつてゆく。

5000mの高地で、コロツケを造つたのは、原田が初めてかもしれない。コロツケのアンダワもコロツケ作りには原田に1本とられた様子であつた。

その後、ヒドンへキャンプを移し、数名を除き11月9日迄滞在し、測量、タシ・カンの偵察、その他の観測を行ない。11月11日ツクチエ村に全員下山したのである。それより早く、11月5日に、中村、カルマの2名はヒドンを下りポカラを径て、カトマンズへ帰着し、帰路の飛行機の予約、ポーター費の準備をし、再びポカラを経て戻り、ノーダラで隊と合流した。

11月13日、ツクチエを出発した隊は、19日無事ポカラへ到着、22日の飛行機に乗りその日の夕方、カトマンズへ戻つたのである。



日本大使館、ネパール外務省、その他お世話になつた方々に会いさつをすませ隊員の帰国予定を話し合い、カトマンズで解散した。

Ⅳ 食糧報告

原田 洋

食糧に関しては、どの遠征隊も頭を悩ませられるものである。食欲が人間の生活に於いて大きな割合を占めるからである。とくに、三ヶ月もの長い登山活動では、食糧の善し悪しで成功、不成功が決まると言っても言い過ぎでない程、影響が大である。献立を作る段階で特に注意した点は、我々の食欲をそそるもの、献立の種類を多くせず融通できること、などを考慮に入れた。また、キャラバンから、アタック迄の分類は三段階に分け、キャラバン、B、C、高所、とし、4人ワンパックとして、レーションの形をとった。

キャラバン

主食は原地の米と日本から持参したスパゲティーを使用、副食は大部分、日本から持っていった。昼食は、弁当を作り、各自に持たせたが、好評であった。ただ、キャラバンではもっと原地食を取り入れるべきで、輸送費、ポーター費の節約につながり、新鮮な物が食べられるということから、反省すべき点であった。

B・C 食

登山隊の根拠地となる所なので、融通性を考え、品物を豊富にした。特に調味料、嗜好品を、ふんだんに用意した。主食は原地米を運び上げ、昼のみ、日本からのビスケットを使用した。5,000 mの高所なので、米が焚けるか、懸念したが、圧力ガマを使用すれば、問題ない。

高地食

完全なるレーションを日本から作って行き、ワンカートン、4人の3日分としてのカートンが、どのキャンプに行っても差支えのない様に考慮した。表のような献立を三種類用意し、嗜好品カートンを各キャンプに分配することにした。

総 評

キャラバン迄に述べた様に、現地食を多く取り入れるべきであった点など、これからの小遠征隊を組むのに研究すべき所である。

肉類は、キャラバンで、ニワトリを使ったが、B、C、高所では農獣医学部食品学科製のウインナー缶、ベーコン、乾燥馬肉を使用、特にベーコン（30Kg）は長持ちし、味が良いので最も良いタンパク源である。当初の計画では、40万円近くの食糧費を考えていたが、日本大学農獣医学部及び食品会社の御援助により20万円の費用で終らせる事が出来た。結果的に思い通りの計画に出来た事は、多くの方々の御協力の賜物だと信じ次第である。

<高所食の一例>

1人日分

朝 食		昼 食		夕 食	
材 料	(g)	材 料	(g)	材 料	(g)
α 米	160	東ハトクラッカー	150	α 米	160
インスタントミソ汁	10	バ タ ー	30	チャーハンの素	10
乾 燥 ヤ サ イ	10	ジ ャ ム	30	ベ ー コ ン	50
サ ケ 缶	50	チ ョ コ レ ー ト	50	乾 燥 ヤ サ イ	10
紅 茶	3	キ ャ ン デ ー	20	コ ン ソ メ	10
ミ ル ク	5	コ ー ヒ ー	5	つ く だ に	30
砂 糖	20	砂 糖	20	日 本 茶	3
総 重 量	258	総 重 量	305	総 重 量	273

V 器 具 報 告

平 野 隆 司

今遠征隊の器具係としては次のような考え方を基本として準備をすすめた。

1. 隊のスケールに合わせた器材を用意する。
2. 普段日本で使っている物を積極的に使用する。
3. 余計な経費は極力避ける。
4. 高所器具及び登攀器具は、質量共に充分なものを用意する。

器具の基本的計画案はむろん最終的には我々の隊に合った独自の計画となる訳であるが総体的には、1954～6年のマナスル隊の報告書を参考にした。

以下主な器具について

露 営 用 具

天幕．なんといっても長期間に渡る登山の為、そのベースとなる天幕生活は登山活動に大きなウエイトを占める。キャラバン用天幕は1962年に使用したものを修理して持参した。又高所用天幕は市販のものより幅5～7cm広くして持参した。その結果多少重量は重くなるが天幕生活の快適さからいうと、その分を差し引いても成功したと思っている。又入口の先端に約1m程の前室を着けて（ファスナーで開閉する様にしたもの）みたが、便利であった。高所天幕にはすべてテロン地を使用した。生地の色は黄・サーモピンク、スカイブルーと持参したが、黄は太陽が出ると中に居られない程暖まる。この種の色には天幕フライが必要である。他に欠かせないのが、天幕フライである。我々はビニロン製を1枚のみ持参したが、とても重宝した。

登攀具．高所用天幕と同様器具の中で1番重要なポイントを占める為、量、質共十分なものを用意した。ザイルは9%ナイロンを主に、フィックスドロープは8%と6%を1,400m程持参し、そのうち800mを使用した。フィックスドパーは硬質アルミの六角型の押し出し材と円型の直径4.8cmのもの2種をそれぞれ90cmと70cmに切断し、頭部に鉄リングを溶接して持参したがなかなか良かった。アイスピトンは、スクリュ一型、コの字型共に良く効いた。紙面の関係上詳細は書けなかったが、装備準備上のポイントは、限定された経費と条件の中で、いかに効率良く、あらゆる状態を想定し、それらを乗り切ることが出来るよう無駄のない計画を組むことではなかろうか。この無駄のないということは、これからの遠征を成功させる場合の絶対条件となろう。

VI 装 備 報 告

樋 山 規 夫

今回のヒマラヤ遠征にあたっての、個人装備は、ポストモンスーンという時期と6,500m前後という高度を、考慮して、ふだん我々が冬山で使用している装備を中心として、計画を進めていった。しかし、秋という時期と、ヒマラヤの自然条件を考えて、防風、防寒には、特に注意した。人体中で1番寒気に弱い、手、足には、毛のオーバー手袋と、ダブルの高所靴を使用する事になり、結局、1部の装備をのぞいては、国内の冬山装備を基準にして、計画が立案された。その内容は、キャラバン、低所装備、高所装備、シェルパ装備に分ける。

キャラバン装備は夏季に我々が使用している衣服をそのまま使用し、その他は小旅行で最低必要とする物を、各自そろえてもらった。

低、高所装備は冬山装備をそのまま使用し、高度に応じて、各自が自由に使用してもらい。高所用装備も各自が今迄合宿で、使用していた物をそのまま持っていった為に、係としての仕事は、不足品の調達と、点検ぐらいになってしまった。その他、隊でそろえた物は、テントシューズ、羽毛服、ズボン、羊毛オーバー手袋、二重の高所靴、キルティング入オーバーシューズであったが、今回は天候に恵まれ、使わない物もあった。このほかに隊長用として、防寒と軽量に重点を、おいた靴を1つ作製した。

シェルパ用装備は隊員と殆んど同じ物を支給したが、予算の都合で高価な物は支給出来ず、登攀中は貸し与えたが、終了後、買い上げるという形で話し合いがついた。

そして、諸先輩から沢山の装備を借用することにより装備はさらに完璧をきすことができたのである。

Ⅶ 医 療 報 告

柴 田 健 一

ヒマラヤでの生活は長期間の入山と、高所での生活が要求される。

過去の遠征隊の記録や高所医学の文献を調べると、いろいろな方面から検討が加えられ解明されている。今回遠征に参加することになり、先輩のアドバイスから最近遠征隊のチームワークの乱れが指摘されているが、高度の変化で精神状態が変わるかどうか調べてみることにした。観察してみると高度による影響か、疲労によるものかを判断することは困難であった。

おこりっぽい、忘れっぽい等10数項目について観察した。すでに計画されている行動については5,000m～6,000mにてもスムーズに行なわれていた。しかしその場その場で生じるできごとに対しては判断力の低下や理論的会話に欠けたり、自分本位になることがあった。

入山后、永い期間を経過すると意欲の減退が生じたり、感情の表現がとほしくなったりするようだった。ねつきの悪さは著明であった。

おこりっぽい、不気嫌、不安、亢奮状態、暴力行為、独語等は生じなかった。

脳は多量の酸素を消費する組織であるから、低酸素状態には敏感なのだろう。

4,000m以上の所では高次な精神作業は障害されやすく、複雑な思考を続けられず、努力してもまちがえることが多いのではないか。身体変化については2,700mと5,000mにて心拍数、血圧、体温を観察してみた。

心拍数は高所では、すなわち低酸素が進むにしたがって増加したが個人差は大きかった。これは心臓からの拍出量を増加して各組織の酸素不足を補うため当然のことである。

2,700mと5,000mでは各隊員20前後の心拍数の増加がみられたが。増増加をみない隊員が2名あった。

血圧は2名を除いて軽度の血圧の上昇がみられた。各隊員とも10～30mm/Hgの上昇をみた。

体温については、病的な状態を除きほとんど変化を認めなかった。

高所順応のむずかしさを体験した。

高所順応の過程で生じる種々の症状で、誰でもが頭痛を訴え、次に食欲不振、全身倦怠感、はきけ、咳等を訴える隊員もいたが、これ等は病的なものではなかった。しかし、ひとたび病的状態におち入ると、呼吸困難、意識障害を伴う重篤な高山病になることを体験した。

4,500 mから5,500 m迄の順応で隊員一名が順応に失敗した。37°台の発熱、咳、食欲不振が4日続き風邪でもひいたぐらいに考え、風邪薬を内服し一時症状が軽快したのでC建設に向った。しかし、帰幕後、呼吸困難、歩行障害が生じたためヒドンキャンプに戻った。

夜間に意識障害、呼吸困難、はげしい咳、39°台の発熱、排尿困難、全身の汗腫が増強し、胸部に雑音が聞えるようになった。酸素吸入、鎮咳剤の注射にて意識障害は改善されるが、中止すると元に戻る。

歩行不能なので背負って下山する。高度が下がるに従って全身状態は著明に改善され、ツクチエに到着後は一人で歩けるようになったが、登山活動はもう不可能であった。

5,500 mより6,500 mまでの順応で隊員一名順応に失敗した。症状は前に述べたのと同じであった。呼吸困難、意識障害、歩行不能であったが、5,000 mの高度まで下がると回復した。5,000 mまでの順応ができていたためだろう。

結論として、重篤な高山病になる以前に隊員の全身状態を把握し、少なくとも5,500 mまで下山し、安静を保つ必要がある。

最後に、60才の高令にもかかわらず、充分な高所順応をして、長期間5,000 mの高所にて活動し、後半になるにしたがって体調が良くなっていった清田隊長の行動には全隊員驚かせられました。

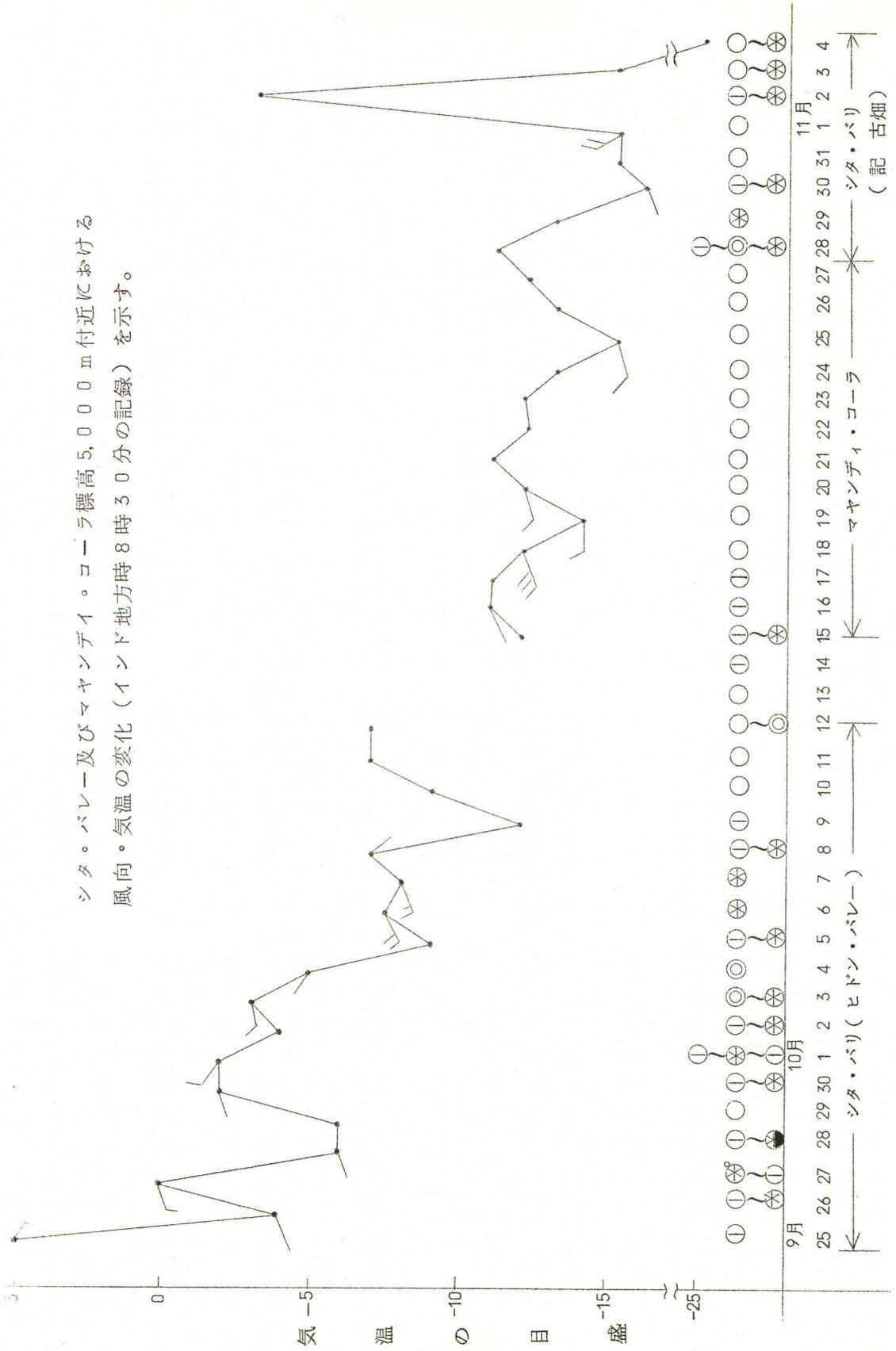
Ⅷ 気 象 報 告

古 畑 勇

今回ポスト・モンスーンの9月末より10月末まで約40日、シタ・バレー及びマヤンデイ・コーラ源頭にて生活をし、図の様な記録が取れたのであるがマヤンデイ・コーラ源頭は南北に走っている谷であり、南にダウラギリI峰、西にシタ・ツツラ及びダウラギリ山群、東にブライトホルン・ツクチエ・ピークがあり、風がマヤンデイ・コーラに添って北上すると、上方西風の為にC1以下は降雪とともに施風となった。一方シタバレーでは西にシタ・ツツラ、ダウラギリ山群があつて分散される為、西風がフレンチ、コルと北尾根コル方面にしか記録されなかった。

天気変化は、25日より30日までは午前中は晴、午後になるとフレンチ・コル方面より雲が浮び上がって雪となる日が続いた。10月1日、今までの風向きが北西となりモンスーン明けを思わせるのか夜西南西に風向きが変わるとともに渡り鳥が、チベット方面より南西方面へ飛んで行った。2日より雪の降るのが後れて来たが、6日、7日の2日間で35cmの降雪を見てから好天が続く、10月25日風速25メートルの風が吹いてから、ダウラギリI峰、II峰は終日雪煙を上げる様になり秋も次第に深まってゆき、フレンチ・コル北側やツクチエ・ピーク北面は、次第に降雪をみる様になる。11月4日シタ・バレーのキャンプ地にて、マイナス24度を記録、6,000メートル以上は、毎日昼頃には雲がかかり降雪をみる。そしてシタ・ツツラも雪煙を上げる様になる。

シタ・パレー及びマヤンデイ・コーラ標高5,000m付近における
 風向・気温の変化(インド地方時8時30分の記録)を示す。



IX 16ミリムービーカメラ

平戸伸之

今回の遠征は当初16ミリ・ムービーの予定がなかったが、出発前にNTVの岩下氏との話し合いで、内容がよければ放映してもよい。しかし、8ミリでは困るので16ミリにして下さいとのことであつたので急拠16ミリを準備することにした。

映写機は日本大学生産工学部のボレックスを借用し、低温に対処するため作動油はシリコン系のものに交換し、ボディはキルティングの保温ケースを取付けた。フィルムはフジフィルムのディライトタイプR25を5,000フィート(3時間分)を用意した。これを帰国後30分位のものに編集する予定であつた。

その他付属部品として露出計、三脚、フィルター等を合せると10キロ近い荷物になり、これを肌身放さず行動することはたいへんなことであつた。

ストーリーは、登山計画の推進力になつた若手OBが、登山というスポーツを通じて、どのようなものの考え方と、どのような行動を起すかを現世代の若者の断面として捕えることを目的とした。

撮影は出発前は隊員とは別に独立した行動を取る予定であつたが、中盤に中山隊員の高山病にともなう下山と戦力の低下により、万已むを得ず戦力に加担せざるを得なくなり、撮影活動は低下した。一方、帰路にて絞りの故障を発見してビックリしたが、大事には至らなかつたのが幸いであつた。しかし、フィルムは全般的に露出不足であつた。原因は露出計を一ケしか準備しなかつたことと、その機械の方が狂っているのではないかと感違ひした程までに青い空と真白な被写体であつた。このような失敗があつてはと出発前に富士登山を行い操作や露出を調べるため予行演習をしたのであつたが、如何にせん素人の城を

出れなかったようだ。帰国後、登山活動の中で意のままにならなかったのは映画だけだねと、隊員からひやかされたり、映画を犠牲にしたからこそ登山がうまくいったのだ同情されるやら痛し痒しである。今回の反省としては、まず、ストーリーをもっとしっかり確立すること、次に機械の操作に充分馴れること、最後に登山に於ける記録としての映画の存在を自覚し、悲情なきまでの探求心の三ツがあげられると思う。

X 写 真 報 告

中 村 進

(一) 撮影計画

キャラバンから登山活動全般に渡り、次の様な内容の被写体を撮影するように、あらかじめ撮影企画をたてた。

1. 登山活動

カトマンズ市内、キャラバン、B.C.生活、B.C.以上の登はん活動、登頂写真、山頂からのパノラマ、周囲の山岳、隊員スナップ食糧、装備、器具

2. 学 術

氷河、山岳、高山植物、動物

3. 風谷、文化

住民、家屋、家内、生活用具、仕事、宗教、遊び、男、女、子供、老人、家畜、動物。

4. 隊員及びシェルパの横顔

カトマンズ市内、キャラバン、B.C.生活、登はん中、撤収、報告書用記念写真。

大体以上であるが、結果的にはその大半を撮影することができた。

(二) 器 材

カメラ……キャノンFT 2台、ランドカメラ 1台

レンズ……35 mm、50 mm、135 mm、300 mm

雑 品……三脚、フィルター、レリーズ、フード、シリコンクロス、シリカゲル。

(三) フィルム

サクラカラーリバーサル……………65本

サクラカラー……………5本

コニパンSS……………86本

コニパンF……………20本

コニパンSS(ブローユー)……………15本

コニパンF(")……………10本

カメラの携持は自由としたので平均隊員1台使用していた。またフィルムは、各隊員へ平均10本程度支給し、自由に撮影してもらい、隊としての記録写真は、係がすべて行なうことにしたのである。

なを、係として撮影したコマ数はカラーと白黒で次の数になった。

カラーリバーサル……………956コマ

白黒……………1182コマ

こうして、遠征を終えて感じることは、写真の記録性ということに関しては、最低限確保できた様な気がするのである。まったくの素人であったが、TTLの1眠レスを用い、数打ち当る式で、とにかく、常に体にカメラをぶらさげて行動した。キャラバンも、食事時も、登はん中も、アタックも、こうした意欲がやっとそこに記録を作り上げてくれた様である。しかし、そこにおいて、写真の基礎知識の不足はいたるところで痛感させられる結果も出ていた。また常に登山の行動が主で写真はその合間、合間に写さねばならず、非常に忙しい、そのためレンズやフィルターや、フィルムの種類をあまり沢山携持しても、のんびりと使い分けていられないので、ボディ2つに、一方に35ミリのレンズ他の一方には100ミリまたは200ミリを着装し白黒フィルムとカラーをそれぞれに入れ、被写体に応じて、レンズ交換するとよい。フィルターはスカイライトで大体は間に合ってしまう。その他予備として、20ミリ、400ミリでもあれば十分であろう。

カラー、白黒フィルムとも、国産のサクラカラーリバーサルASA100、コニパンSS等が中心であったが、特別な用途がなければ、国産フィルムで十分であろう。

今回、係をあまりにも多く兼任し、出発までに十分な準備ができなかったのは少々残念でもあるが、先にも述べた様に、常にカメラを体から離さず、撮影意欲をもち、被写体にくいついてゆくことが1番のポイントの様な気がするのである。

XI 輸 送 、 包 装

1. 輸 送

中 村 進

水道橋にある大学本部の地下1階には、山岳部のルームがある。その隣にこわれかけたシャワー室が空部屋となっており、ここを今回の遠征期間中、大学より借用することができたのである。

ここで、食糧、装備、登はん器具等の準備が、毎日遅くまで隊員達によって進められていった。

輸送計画は、この事務所を出発点として、始められたのである。目的地のカトマンズまでは、色々な輸送ルートが考えられたが、最終的に我々は、次の様なルートを用いた。

横浜 → カルカッタ → (陸送にて)カトマンズ、帰路も同様である。

このルートは、関係雑誌に数多く紹介されているので、詳細は省略させていただくことにするが、今回の輸送に関して気の付いた幾つかを箇条書にしてみたい。

1. 目的地までの輸送方法の第1条件は、安全確実に着く方法をとるべきであり、急がば回れ、である。
2. 輸出入に関する基礎知識の精通、F O B、C I F、B / L、インボイス等の貿易用語の意味をよく理解しなくてはならない。
3. 輸送費節減に関しては、ベンガル港船運賃同盟の50%ディスカウントが適用された、さらに、乙仲の諸経費の内、自分達で出来るものは、自分達で行ない、経費節減を計る。
4. カルカッタの乙仲はExpress Clearing Agency 14/2 Old China Bazar Street Calcutta-1 に依頼し、トラックの手配も依頼した。陸送は、Dooars Transportが行ない私も同行したが、今後、同行は不要に思う。国境で待期しておればよい様に感じる。

5. カルカッタにて必要な書類は(1)登山許可証のコピー 1部 (2)輸入許可証のオリジナル 1部 (3)B/L(船積証券) (4) INVOICE(送り状)とパッキング・リスト 10部 (5)ブランク・レター 10部 (6)ロード・パーミッション(Road Pemit ion) 1部 以上である(2)と(6)を除いた書類は、カルカッタより投函、(2)は、その後カトマンズにて交付を受け、荷物が陸上げされる時持参した。(6)は、私的物資の輸送に関しては、在カルカッタ、ネパール領事館発行の輸送許可証が必要であった。これは、在カルカッタ日本領事館にて、リコメンデーションをいただき、入手した。

6. カトマンズでの通関は、必要書類がきちんとそろい、パッキングリストの合計額が正確でなくてはならない。食糧、医薬品等の消耗品には15%の輸入税がとられ、装備、器具等の再輸出品には、10%のセール・タックスと15%の輸入税がデポジットとして徴収された。登山終了後、再輸出する時、新しいパッキングリストに基づき、デポジットは正確にペイバックされ、このルピーは、再輸出の経費として、当初より計画的に使用した。我々のデポジット・マネーの総額はRs 7,326.16NC(約24万円)であった。

7. 再輸出に関しては、外装木箱を確保しておき、自分達でこん包し、マーキングした。

再輸出の時は、トラックに同行しなかったのであるが、オリジナルの輸出許可証をドライバーに渡してしまい、それが、カルカッタで船積みの際、乙仲に渡तराず、2度輸出許可証を申請する。というトラブルをしてしまった。結局自分で直接カルカッタの乙仲へ持参し、船積みすることが出来た。

なを、船荷が日本に着いた後、B/Lが届かず、カルカッタに再三再四、電報を打つなどしたが結局、1ヶ月近くも、荷物の引き取りがのびてしまった。

最後まで、油断を許さないトランスポートーションである。

2. 包 装

中 村 進

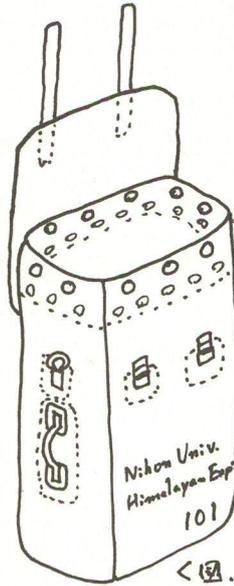
包装の最少単位は、たとえば砂糖50g、といったものであり、これには、使い良さ、防湿、強度、軽量を考えなくてはならない。それより少し大きくなると、3人日分とかいう単位の包装である。そして次は、3人日分×7日間というふうに次第に大きくなってゆく、この段階では、登山活動にがっちりと適合する様に考えなくてはならず、荷上げ、登はんを考えると、カーターの大きさは、厚さ、巾、高さも必然的に、人間の背丈に合わせて決ってくる。重量もそうだ、1カートン15Kg、2つで30Kgといった数字が出てくる、こうした背景に基づいて、包装は考えねばならない。小さな単位の包装には、東京セロハンのK.O.Pラミネート紙を用い、乾燥肉、や野菜は、日本ポリセロ工業の協力を得て、窒素充填や、真空パックを行なった。その上の単位では、それらを、大きな厚いポリ袋に入れ日本エベレスト登山隊が使用した、二重ダンボールに納め、外側をガムテープでしっかりととめ、マーキングをした。それを、2つ縦に重ね、さらにバンドで止め、総重量を30Kgに統一し、ポーターの1名分の契約重量に適合させたのである。そして最後に6つ1組にして外装木箱で打ちつけ、外側四面に、図1.の様なマーキングをして完了である。

一方、登はん具、装備等は、すべて柳ごおりに納め、それを、特別に設計製作したキャンバス(図2.)に入れ、これらも、大体6ケースずつ外装木箱に納めたのである。さらに次に示めす表の様に、分類番号を使用したのである。たとえば101の初めの1は個人装備、401の4は炊事用具、といったふうである。

大体以上であるが、いずれも予定どおり、仲々順調に使用することが出来た。

Nihon Univ Himalaya Exp. 1970
 KATHMANDU
 VIA CALCUTTA
 No. 1

マーキング <図. 1.>



<図. 2>

ふた付きキャンバス

用途	包装	分類番号	品名	標号-No.	キャラバ	B.C	C1以上
個人装備	キャンバス	1	01~99	01~99			
食糧	カートン	2	〃対応〃		A. B. C S. PH. SPS	A. B. C SPH. SPS	A. B. C SP
露管用具	キャンバス	3	〃	〃			
炊事用具	〃	4	〃	〃			
登山用具	〃	5	〃	〃			
気象・通信	ジュラルミン Box	6	〃	〃			
医薬品	〃	7	〃	〃			
撮影用具	〃	8	〃	〃			
色別					青	緑	赤

個人装備……オレンジ色.

<図. 3>

XII 会 計 報 告

期間 自昭和44年10月1日
至昭和46年12月31日

(単位：円)

収 入		支 出	
1. 日本大学補助金	1,000,000	1. 渡 航 費	2,264,345
2. 桜門山岳会 会員寄付金	1,121,500	2. 装 備 費	817,768
3. 桜門山岳会 ヒマラヤ基金	510,000	3. 食糧購入費	227,559
4. 桜門山岳会会員関 係会社・友人寄付金	176,000	4. 映画・写真撮影費	241,875
5. 山岳映画会収益金	161,660	5. 包装・梱包費	144,911
6. 隊員関係学校 会社・友人寄付金	529,296	6. 荷物輸送費	546,457
7. 隊員個人負担金	3,121,270	7. 保 險 費	330,527
8. その他寄付金 又は収入	141,000	8. 気象・通信機費	9,070
		9. 事 務 費	126,468
		10. 通信連絡交通費	99,240
		11. 現地滞在費	215,337
		12. リエゾン・ オフィサー費	93,669
		13. シェルパ雇用費	255,040
		14. ポーター雇用費	601,167
		15. 登 山 費	213,869
		16. 雑 費	253,314
		17. 残 金	320,110
計	6,760,726	計	6,760,726

注) 収入欄中第3項桜門山岳会ヒマラヤ基金は借入金はつき返済いたします。
従つて、510,000円－320,110円＝189,890円の欠損となります。
この欠損分については参加隊員の積立を行い、昭和46年12月31日全
額返済いたしました。

1. 寄附金明細

(1) 日本大学 1,000,000

(2) 桜門山岳会会員寄付金 1,121,500

内訳 (敬称略)

宮原 巍	100,000	米山 直治	10,000
金坂 一郎	50,000	千谷 壮之助	10,000
戸村 貞男	30,000	岡 正二	10,000
小島 八郎	30,000	河内 邦介	10,000
池田 錦重	30,000	津村 利男	10,000
鈴木 馨	30,000	野田 福五郎	10,000
山口 摂郎	20,000	守山 嗣男	10,000
芝田 稔	20,000	横沢 利武	10,000
鳥海 昭二郎	20,000	帆足 興之	10,000
北村 二郎	20,000	岡本 如矢	10,000
山本 晃弘	20,000	恩田 敏造	10,000
平山 善吉	20,000	堀越 茂夫	10,000
熊谷 義信	20,000	松田 雄一	10,000
関 孝治	20,000	鹿島 英功	10,000
今村 文彦	15,000	桜井 昭	10,000
尾上 昇	15,000	木村 勝久	10,000
三好 勝彦	15,000	深瀬 一男	10,000
林 幹夫	10,000	青木 重雄	10,000
武藤 正弘	10,000	中島 啓	10,000

飯島正敏	10,000	森下吉雄	5,000
赤井一隆	10,000	佐藤幸雄	5,000
谷口元	10,000	平野規一	5,000
片柳実	10,000	程島三郎	5,000
高緑繁伸	10,000	脇田昭	5,000
神崎忠男	10,000	守屋喜久夫	5,000
山平靖	10,000	中川勝次	5,000
川口洋之助	10,000	志水進	5,000
長島宏	10,000	石井達男	5,000
小栗孝康	10,000	小金井清治	5,000
小島一男	10,000	鈴木基之	5,000
戸倉正博	10,000	田中省三	5,000
猪爪宗雄	10,000	三井英夫	5,000
嵯峨野宏	10,000	村上智一	5,000
浜大剛	10,000	山崎隆史	5,000
多和田忠	10,000	斎藤磨積	5,000
関淳一	10,000	松本陸雄	5,000
加藤捷治	10,000	多田勇三	5,000
初見一男	5,000	真島恒雄	3,000
崎田熙	5,000	素木三	3,000
藤田達夫	5,000	秋庭鉄之	3,000
遠藤二郎	5,000	森泉寿夫	3,000
本片山数雄	5,000	村石幸彦	3,000
寺島信一郎	5,000	氏井正巳	3,000
松井正	5,000	武田哲男	2,000

落合 普	2,000	奈良 勝三	1,500
丸山 精一	2,000	大林 弟三	1,000
榎並 洋三	2,000	長岡 道男	1,000
大島 育雄	2,000	関西桜門山岳会 会員一同	100,000

(3) 桜門山岳会ヒマラヤ基金 510,000

(4) 桜門山岳会会員関係会社、友人寄付金 176,000

内訳 (敬称略)

平沢運輸株式会社		20,000
昭和油槽船株式会社		20,000
昭和通運株式会社		20,000
小名浜運送株式会社		10,000
日平興業株式会社		10,000
福島 繁雄 (中島 啓OB友人)		50,000
青木 繁 (")		10,000
大城 泰 (")		10,000
高山 公明 (")		5,000
徳田 昌久 (")		5,000
榎本 匡伸 (")		5,000
中島 修 (")		5,000
下崎 雄二 (")		3,000
石井 幸夫 (")		3,000

(5) 山岳映画収益金 161,660

(6) 隊員関係学校、会社、父兄、友人寄付金

529,296

内訳 (敬称略)

中川隆四郎	(清田隊長友人)	100,000
大泉 清	(清田隊長研究室卒業生)	82,000
村松 英一	(")	5,000
水野 俊彦	(")	5,000
日比野 樹	(")	5,000
鷹巢 政夫	(")	5,000
鷹巢 万蔵	(")	5,000
大島秀一郎	(")	5,000
筒井 康郎	(")	5,000
大内 増矩	(")	5,000
石井 進	(")	5,000
井原 信二	(")	5,000
野田 武彦	(")	4,000
中浜 耕平	(副 手)	3,000
及川 恭男	(清田隊長研究室卒業生)	3,000
三宅 進	(")	3,000
小田 亨	(")	3,000
石田 一夫	(")	3,000
緑 栄新	(")	3,000
不二門博信	(")	3,000
南部 治雄	(")	3,000
安藤 省一	(")	3,000
広田 豊実	(")	3,000
矢口 健一	(")	3,000

松本 吉弘 (清田隊長研究室卒業生)	3,000
川島 通治 (")	3,000
磯田 博 (")	3,000
岡野 拓 (")	3,000
中央ビルト工業株式会社役員一同(高橋副隊長勤務先)	20,000
中央ビルト工業株式会社 (")	10,000
" みやこ山の会会員一同 (")	10,000
佐々木卓次 (")	10,000
木村 隆行 中島 順二 (")	10,000
中央ビルト工業株式会社名古屋工場従業員一同 (")	7,100
中央ビルト工業株式会社野球部 (")	5,500
油布 達雄 (高橋副隊長勤務先)	5,000
長倉 襲二 (")	3,000
近藤 理昭 (")	2,000
卜部 薫 (")	1,000
加来 直美 (")	1,000
成田 久雄 (")	1,000
根津 皖一 (高橋副隊長友人)	20,000
藤井 邦昭 (")	3,000
中村 幾男 (中村隊員の父)	50,000
日本製鋼所(株)スキー部 (平戸隊員勤務先)	10,196
日本製鋼所(株)射出機械課 (")	10,000
窪垣内重伸 (")	10,000
青木 巖 (")	10,000

福光 勝利 (平戸隊員勤務先)	5,000
日 大 会 (")	3,000
広島労働組合 (")	3,000
郷地三千春 (")	2,000
花木 公康 (")	2,000
世羅 幸則 (")	2,000
車地 茂 (")	2,000
三上 リツ (")	2,000
荒木 豊 (")	1,000
中村 善次 (")	1,000
岡本 栄子 (")	500
黒河智寿恵 (")	500
益本ユキノ (")	500
武藤 山治 (平戸、古畑両隊員友人)	25,000

(7) 隊員個人負担金

3,121,270

内訳

清田 清	321,270
高橋 正彦	300,000
中村 進	300,000
古畑 勇	300,000
平戸 伸之	400,000
平野 隆司	300,000
原田 洋	300,000
樋山 規夫	300,000

中山 昌之	300,000
柴田 健一	300,000

(8) その他寄付金又は収入 141,000

内訳 (敬称略)

瀬能井 衛 (瀬能前山岳部長御子息)	10,000
八王子ヒヤラヤ登山隊 1971	10,000
毎日グラフ原稿料	100,000
山と溪谷社原稿料	16,000
毎日グラフ別冊原稿料	5,000

2. 物品寄贈者又は会社名 (敬称略、五十音順)

朝岡香辛料(株)、あみ印食品(株)、伊藤園(株)、神田精養軒、群馬日野自動車 KK、ケンコーハム(株)、斎藤磨積(日大OB)、サクマ製菓(株)、三幸雑貨店、ゼネラルフーズ(株)伊丹工場、泰静社、高緑繁伸(日大OB)、東京果精(株)、東京香辛料(株)、東京セロファン紙 KK、東鳩東京製菓(株)、日米商会(小西六写真工業(株))、日新加工(株)、日本大学医学部、日本大学農獣医学部、日本ポリセロ工業 KK、ミート商会、横須賀魚業組合、脇屋武一

3. その他の協力者名 (敬称略、五十音順)

池田錦重(日大OB)、エバニュー(株)、神崎忠男(日大OB)、キャセイ食品(株)、嵯峨野宏(日大OB)、山友社たかはし、管原豊三(明大OB)、中村毛皮(株)、高田屋、中央ビルト工業(株)みやこ山の会、チョゴリザスポーツ店、中島啓(日大OB)、長嶋宏(日大OB)、日本山岳会、日本大学生産工学部、平野東司(隊員兄)、樋渡隆芳(隊員友人)、深瀬一男(日大OB)、松田雄一(日大OB)、万有栄養(株)、宮原巍(日大OB)、山田和夫(隊員友人)、吉田テント(株)、渡辺スポーツ(株)、上信自動車工業 KK。

XIII 行 動 日 誌

中 山 冒 之

- 7月25日 晴、先発隊中村、平野羽田を出発。
- 8月20日 晴、シタ・ツツラの登山許可がおりる。
- 8月29日 晴 本隊清田隊長以下8名羽田を出発。
- 8月30日 晴時々雨 カトマンズに全隊員集合。
- 9月 3日 晴後雲 高橋、原田、ブルバ・キタル、ポカラへ先発。
- 9月5日 晴後雨 清田隊長の他隊員6名、シェルパ3名、リエゾン・オフィサー1名、ポカラ到着後直ちにキャラバン開始。平野、中山は酸素の到着までカトマンズに待期。
- 9月 6日 雲り後雨 ルムレ着、ポーター9名、ナイケ2名。
- 9月 7日 晴時々雨、ルムレ→テイルケ。
- 9月 8日 晴 テイルケ→チトレ
- 9月 9日 雲り時々雨 チトレ→タトパニ
- 9月10日 晴後雲 タトパニ→ガンサ
- 9月11日 雲 ガンサ→カロパニ
- 9月12日 晴後小雨 カロパニ→ツクチェ
- 9月13日 小雨 ツクチェ村からカルカまで荷上げを行なう。
- 9月14日 雲 1日遅れて、31名のツクチェ村のポーターにより残った荷物をカルカまで上げる。
- 9月15日 雲 先発の荷上隊、タバ、コルに着く、後発の隊も大体同地点に至る。
- 9月16日 雲 ヒドンバレーのキャンプ予

定地に全物資を集結、シェルパ2名残り、他隊員、ポーターはカルカまで下る。

- 9月17日 雲 ブルバ、アングワの2名はヒドンキャンプ、テンパはタバ、コルのキャンプにそれぞれキーパーとして残る、隊員は全員ツクチェ村に集結。
- 9月18日 晴後雲 今日からヒドンキャンプ迄、全隊員の高度順応を行なうことにする。
- 9月25日 雲り後晴 約8日目にヒドンキャンプに全員集結した。これまで順応日数にかなりの個人差がみられた。
- 9月26日 晴後雪 全員休養し、荷物の整理、点検を行なう。
- 9月27日 小雪後晴 4パーティに分れ、シタ・ツツラの登頂ルートの偵察に出発。
- 9月29日 小雨 各パーティの偵察の結果フレンチコルの南側より北東にのびる尾根を使用することに決定。
- 9月30日 晴後雪 北東尾根取付地点にBCを建設するため、荷物の移動を行なう、この日、ヒドン、BCを2往復する。
- 10月1日 晴後雪後晴 B・C建設、隊員5名、シェルパ3名B・C入り。
- 10月 2日 晴後雲 高橋、樋山、中山B・C入り、清田、柴田、アングワヒドンキャンプ、中村他7名。C1建設及び荷上げを行なう。
- 10月 3日 雲後雪 全員にてC1への荷上

- げを行なり、中山隊員の調子が悪い
- 10月 4日 雲時々雪 中村、平戸、古畑、ブルバC1入り、高橋他6名C1の荷上げ、中山B・Cで停滞。
- 10月 5日 晴後風雪 中山君の容体悪るく柴田ドクターのいるヒドンキャンプへ原田、ニマ・プタールが一諸に下る。高橋、樋山、C1入り、中村、平戸、古畑、ブルバC2予定地の偵察を行なり。
- 10月 6日 風雪 中山隊員の容体悪るく、柴田ドクターの指示により直ちにツクチェに下すことになる。中村他3名C1よりB・Cに下る。平野他2名C1入り。
- 10月 7日 風雪 中村他3名、ヒドン入り高橋他3名C1停滞。
- 10月 8日 晴時々雪 清田隊長以下10名中山隊員の救出を開始、高橋他5名C2建設及び荷上げを行なり。
- 10月11日 中山隊員ツクチェ村に無事到着、容体は急速に快復する。
- 10月15日 晴後小雪 中村他5名B・C入り高橋他4名、C2への荷上げも大体終了し、C1にて休養。
- 10月17日 快晴 中山隊員の無事救出を終えてから約11日目再び全隊員がC2に集結。
- 10月18日 晴 C3へのルート開拓を開始する。
- 10月19日 快晴 C3建設
- 10月20日 快晴 中村、平戸、ブルバ、ニマ、C3入り、他C2にて休養
- 10月21日 快晴 高橋、平野、原田、C3入り、清田隊長、柴田ドクターB・C入り。
- 10月23日 快晴 高橋、平野、原田により稜線までのルート工作終了する。
- 10月24日 快晴 高橋他6名C3入りし、明日のアタックにそなえる。
- 10月25日 快晴 第1次アタック隊中村、平野頂上直下にて引き返す。
- 10月26日 快晴 高橋、平戸、原田、ブルバの4名、午後2時45分シタ、ツツラの初登頂に成功する。
- 10月30日 晴後雪 全テントを撤収し全員B・Cに集結。
- 11月 1日 快晴 B・C撤収し全員ヒドンキャンプに移る。
- 11月 4日 晴後雪 平戸、平野、樋山、ニマ、タシ・カーンの偵察に出発、清田隊長、柴田ドクターはテンバ、ウォンゲルを連れヒドンレーを下降後、マルバへの下山コースをとり出発する。
- 11月 5日 快晴 中村は帰路の経費調達及び飛行機の予約を行なりため下山。
- 11月11日 快晴 ヒドン・キャンプ撤収。
- 11月12日 晴後雲 全員ツクチェ集合
- 11月13日 晴後雲 全隊員ツクチェ村を出発、帰路キャラバンに入る。
- 11月14日 快晴 清田隊長他13名タトバニ着、中村カトマンズ着。
- 11月18日 晴 高橋他10名スイケット着中村とノダラで再会、清田隊長、柴田ドクター、ウォンゲルはこの日1日早くボカラに着く。
- 11月19日 晴 全員ボカラ着。
- 11月22日 晴 全員カトマンズに帰着。
- 11月26日 晴 大体の荷物の整理を終える古畑隊員とアンダワ、ピラトナガルへ出発。
- 11月27日 晴 清田隊長ボンベイへ出発高橋、平戸、樋山、柴田ダー・ジリンへ出発中村、原田、中山、再輸出の荷物の梱包を行なり。
- 11月28日 晴 原田、中山ピラトナガルへ出発、中村荷物の通関を終了。
- 12月 1日 晴 中村バラビシへ出発。

XIII THE FIRST ASCENT OF SHITA CHUCHURA

Nihon Univ. Himalayan Exp. 1970

—BYS. NAKAMURA—

Nihon University Mountaineering club sent an expedition to an unnamed peak of the Dhaulagiri region to carry out the expedition during post-monsoon season 1970.

The unnamed peak was situated between Dhaulagiri II (7751m) and Tukche peak (6920m).

However, not only we could not find out name but also we could not altitude of the mountain by map.

Members of the expedition

Members,

Prof. K. Seita (61) Leader
M. Takahashi (32) Sub L.
S. Nakamura (24)
N. Hirato (24)
I. Furuhata (25)
R. Hirano (23)
H. Harada (23)
N. Hiyama (23)
M. Nakayama (24)
Dr. K. Shibata (32)

Shelpas,

Phurba Kitar	(39)	Sardar
Nima Putar	(35)	
Temba	(26)	
Ang Dawa III	(35)	Cook
Wangel	(21)	Kitchen boy
Karma	(30)	Mail runner

Liaison officer

Panch Bill Rai (30)

Proceeding of the Expedition

Sep. 5 We started from Phokara to Tukche with
 handred poters.

Sep. 12 Arrived at Tukche

Sep. 13 The equipment and food of all was carried
 for Hidden Valley by seventy eight poters.

Sep. 25 The members of all gathered in Hidden Camp
 (5,000 m)

Sep. 27 - 29 We decided East Ridge as an attack route
 for Summit after reconnoitered by four
 parties.

Oct. 1 Set up B.C at the altitude of around 4800 m
 on the Mayandi Glacier

- Oct. 6 It happened a trouble that one of Member
had mountain sickness in 5000 m high. We had
to take him to Tukche Village as soon as
possible.
It spent eight days to the help.
- Oct. 20 Set up C.3 at right under J. Peak.
It was 6300m high.
- Oct. 25 Nakamura, Hirano who tried to assault
Summit were unsuccessful
- Oct. 26 Takahashi, Hirato, Harada and Phurba reached
the Aummit of Shita Chuchura (6740m). They
took eight hours from A.C to Summit.
- Oct. 30 All of our members turned back B.C
- Nov. 4 Four members of us went to Tasi Khan (6320m)
to reconaissance
- Nov. 10 Left B.C for Phokara
- Nov. 19 Got to Phokara
- Nov. 26 Left Kathmandu for Tokyo

In this time, we fortunatry succeed to the first acent of the mountain in Daulagiri regien without any accident.

With reference to the name of the mountain, we had a discussion with Mr. Panch, B. Rai who was a rieson officer, Mr. TORACHAN who was a LAMA in Tukche village, Prof. Mr. K. Seita who was a Leader of the expedition, and Mr. M. Takahashi who was a Sub Leader after finished climbing in Tukche village. and then, They had decided for the name which was named SITA CHUCHURA about the mountain according to the discussion.

SITA means the name of a wife of LAMA in Nepaly. CHUCHURA means sharp peak in Nepaly.

We hereby proposed the name to His Majesty's Government of Nepal after returned Kathmandu from Bace Camp.

The other side, we Surveied the altitude of the mountain by transit in accordance with the altitude of Daulagiri I (8167 m), and of Tukche peak (6915 m).

In result of servey, The transit found out the altitude between 6700m and 6800 m correctly.

Therefore, we had decided to use an altitude 6740m on the average.

We hereby should like to express our very sincere gratitude concerning His Majesty's Government of Nepal has decided to grant permission to Nihon University Himalayan Expedition to carry out the expedition to SITA CHUCHURA instead of Bhauddha Peak.

MEDICAL REPORT

(Kenichi Shibata)

It is demanded to live for a long time at the higher place like Himalaya.

Though a large number of literature reported about it.

We wished to observe and to have an experience ourself.

That is to observe a variety or condition of psychiatric test at the high place.

But, it was really difficult to judge them, since we could hardly to understand that came from the fatigue or influence of something.

So I tried to make reports about ten problems.

Those morements which had already scheduled were carried smoothly at 5000 ~ 6000 m, high. Sometimes they were selfishness and to decrease of judgement in case of some unusual condition. The life in the Tent made us, for instance, they could not have a theoretical conversation, and were wanting in expression of emotion. We could hardly sleep.

Volition decreased for a longtime.

Touchy, displeasure, anxiety and excitement were nothing.

The brains needs oxygens so that it becomes sensitive to the low oxygen situation.

It is considered that the complicated way of thinking is

impossible for a long while, and it even proves to mistake sometimes at higher place more 4000 meters.

We counted the pulsation, and the blood pressure, or the change of physical temperature on adapting to the higher place, all member of the groupse had headache, loss of appetite, dullness, cough and nausea. Critical high mauntain sickness indicated difficulty in breathing, fever, difficulty of consciousness. According as low oxygen, pulsation increased at the high place. Pulsation of our members increased about 20/minute except only two members. They had 10 to 30 mm/Hg high blood pressure except only two members.

Any change of temperature could not seen on clinical thermometer.

It was really good experience for us to know how difficult to adapt ourself to the higher place through the mountain climbing to the Himalaya this time.

XV シタ・ツツラ (Sita Chuchura) の山名について

高橋正彦

登山許可証には、次の様に書かれてありました。「The north-west peak of tukuche」しかしその位置からして、適当でないと考え、現地にて、リエゾン・オフィサー、トラチャン、清田隊長、高橋で協議検討した結果、ヒドンバレーは現地名ではシタ・バリと呼ばれており、「シタ Sita」は、ラマの夫人を表わし、サンスクリット語で書かれた国民的な叙事詩「ラマヤーナ」の登場人物である。この谷の源頭にどっかりと大きくそびえる山にふさわしい名として、シタ・ツツラといたしました。ツツラ (Chuchura) は尖った頂を意味します。

そこで「ラマの女神の山」とでも呼べるでしょか、シタ・ツツラと命名し、ネパール外務省に申し出をしてきたのであります。

正式な決定は審議委員会によってなされる予定です。

XVI シタ・ツツラの高度について

高橋正彦

ヒドンバレーにて、ダウラギリ主峰 (8167m)、ツクチェピーク (6915m) 等の高度を基本に、トランシットを用いて高度計算いたしました。

その結果 6700 ~ 6800 m の数字を得、計算の結果、6740 m を採用することにいたしました。

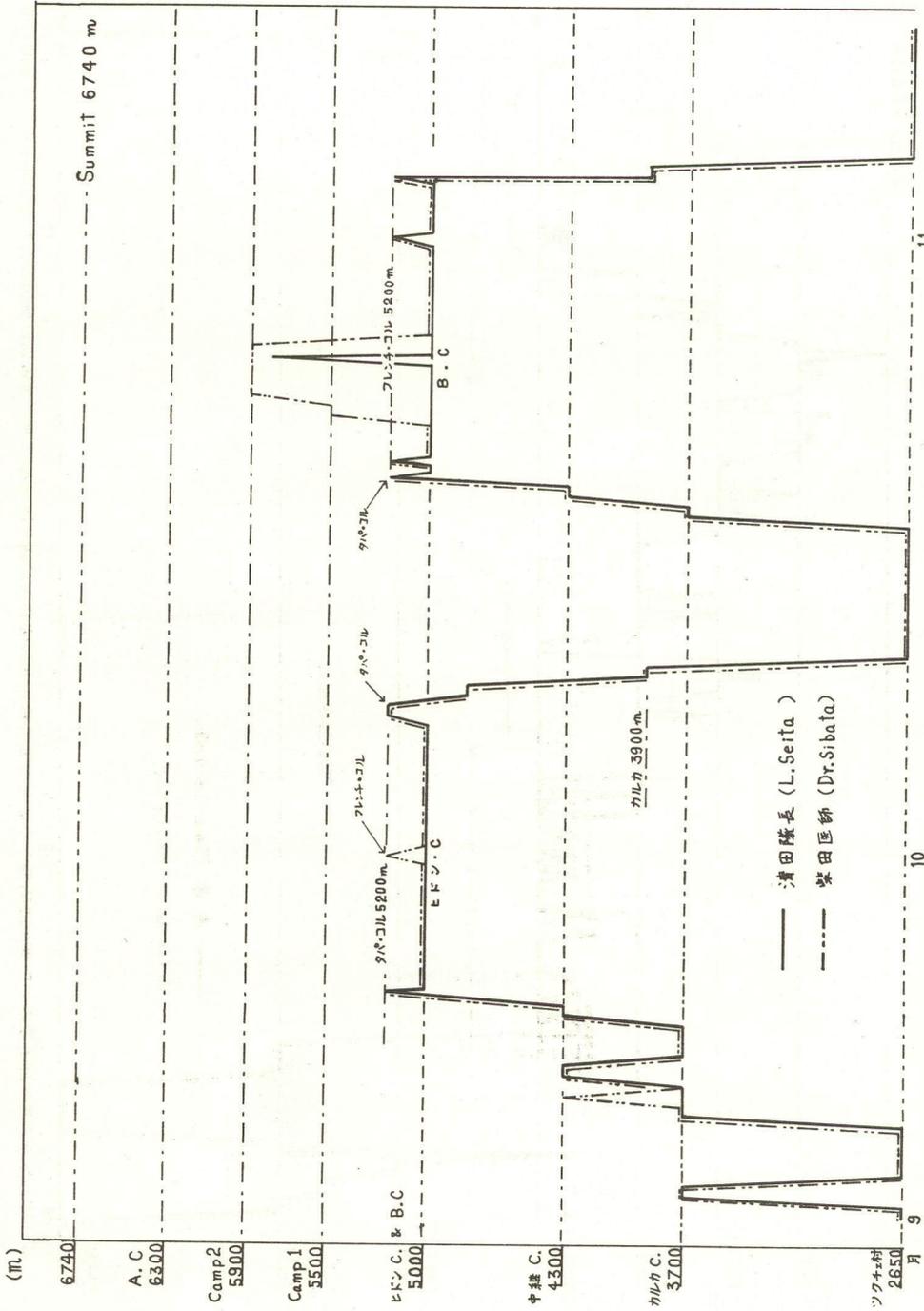
お　わ　り　に

今度の遠征は、若手ヒマラヤ経験者の育成ということもあってか、隊長、副隊長、医師を除くと平均年齢23才という若者達で構成された。目標の山はヒマラヤでは初級に属するものであったが、全員ののはち切れんばかりのファイトとその若者達をも凌ぐ清田隊長の登山家としての山に対する深い執念が、みごとに結集し、登山では一般に難かしいとされている初登頂を、一枚の写真を唯一の資料としてこれを果すことができた。

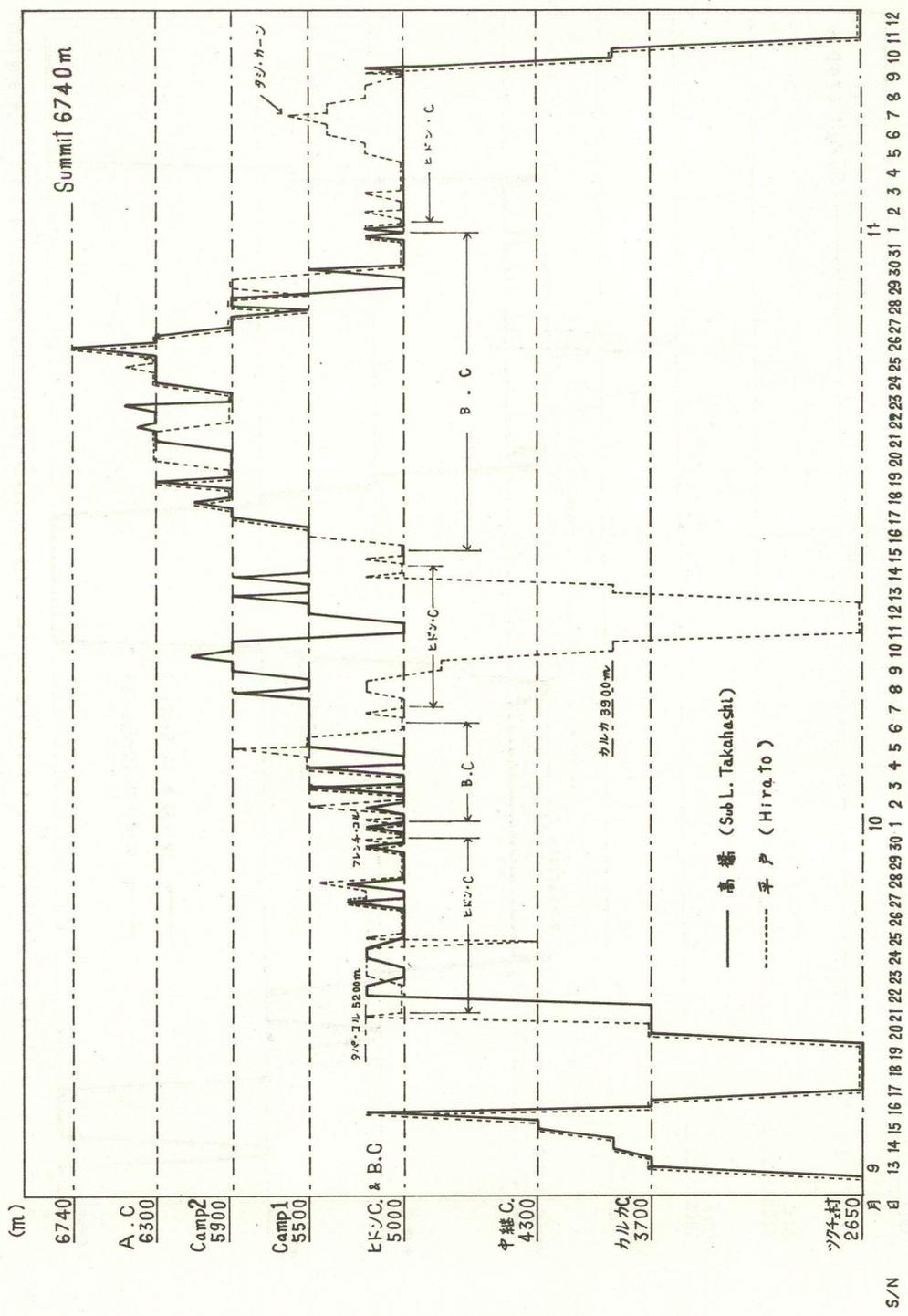
この経験と自信が、自己の登山に、人生に、後輩の指導に、そして山岳部の発展に発揮されてゆくことを念願したい。事実、今春のヤルン・カン登山隊には、この経験者の中から4名が参加し、その経験と実力を証明してみせてくれた。一方、この遠征を実現することが出来たのは、多くの方々の物心両面からの深い理解と協力があったことを述べなければならない。大学当局、保健体育局、医学部の両山岳部OB、企業、友人、知人、そして家族の方々である。

この項をかり、深く感謝するとともにお礼申し上げる次第であります。



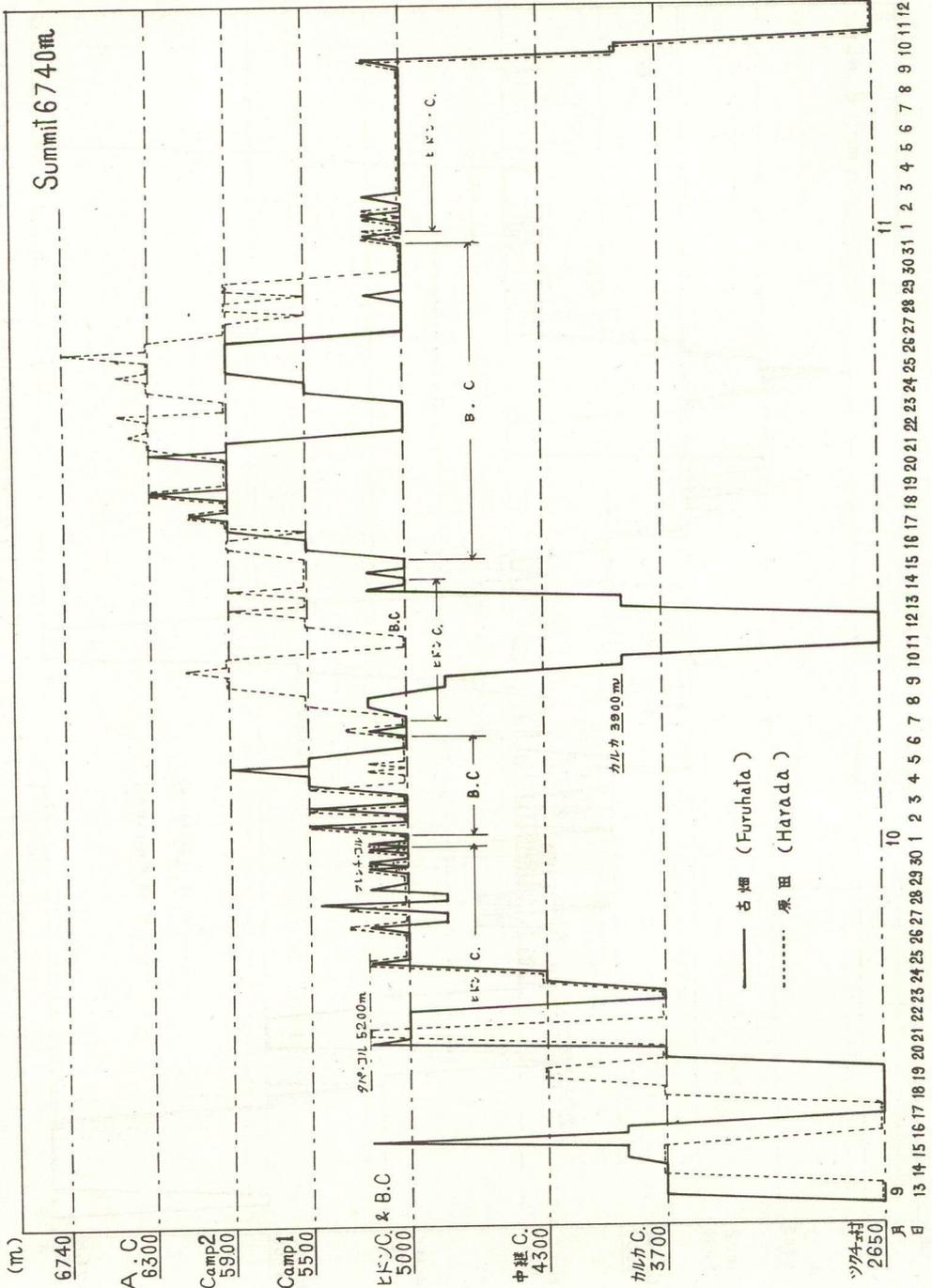


S/N 日 15 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12



9月 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

S/N



S/N 日 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

編 集 後 記

遠征を終えてから、すでに4年目を迎えようとしている。報告書には、正しく記録し、速やかに伝達する、という使命があるとすれば、特に今日のようにヒマラヤ登山に関する様々なことの動行が激しい時にあっては、なおさら速やかに発行するのが望ましい。この観点からすると、ここに登載されている原稿は3年前のものであり、すでに報告書としての価値を消失しつつあるかもしれない。さらに仮報告書に使用する予定の原稿であったので、原稿は簡潔に書かれている。渉外、輸送、またヒマラヤ登山規則の一部にも変化が生じ、多くの箇所を修正しなくてはならないが、すでに数年前に印刷を終えてしまっており、経費の面で再印刷は困難であるので、このまま使用することにした。読者の方々には、この点よろしくお願いするとともにご了承ください。

これは、一重に編集を受けもった者の怠慢にほかならず、この項を仮りお詫びしたい。尚、報告書発刊に際しては、坂井義隆氏に数年間に渡り多大な協力をいただいた。また本文の印刷には、半谷伸俊OBに協力いただいた。かさねてお礼申し上げる次第であります。

(中村)

シタ・ツツラ初登頂

昭和46年10月24日印刷

昭和49年12月25日発行

編集発行 日本大学ヒマラヤ登山隊
東京都千代田区西神田 2-6-16
日本大学本部内・日本大学山岳部
Tel 03 (261) 2097

印刷 京浜印刷株式会社
コロニー印刷

隊員の勤務先及び現住所

(1974年12月)

- 清田 清 日本大学生産工学部教授
自宅・東京都板橋区双葉町33
Tel (自) 03 (961) 2464
- 高橋 正彦 中央ビルト工業大阪工場
自宅・大阪府高槻市牧田町1319
富田団地43-108
Tel (会) 0726 (75) 6421
- 柴田 健一 日本大学駿河台病院整形外科医師
自宅・神奈川県逗子市久木4-9-13
Tel (自) 0468 (71) 2464
- 中村 進 日本大学芸術学部写真学科学生
自宅・東京都杉並区久我山3-32-10
Tel (自) 03 (333) 0268
- 平戸 伸之 株式会社日本製鋼所広島製作所
自宅・広島県安芸郡船越町松石新開2006
Tel (自) 08282 (2) 6314 J-2-2
- 古畑 勇 古畑室内装飾社
自宅・東京都保谷市ひばりヶ丘2-10-16
Tel (会) 0424 (21) 6679
- 平野 隆司 自宅・東京都品川区大井5-26-10
鈴木荘202
Tel (自) 03 (771) 4554
- 原田 洋 郵船航空サービス株式会社
自宅・東京都練馬区三原台1-34-1
Tel (自) 03 (924) 1574
- 樋山 規夫 株式会社稲田水道工務店
自宅・川崎市多摩区菅3402
Tel (自) 044 (91) 5926
- 中山 昌之 魚熊商店
自宅・茨城県大洗町204
Tel (自) (029267) 3542

日本大学山岳部・桜門山岳会

NIHON UNIVERSITY MOUNTAINEERING CLUB